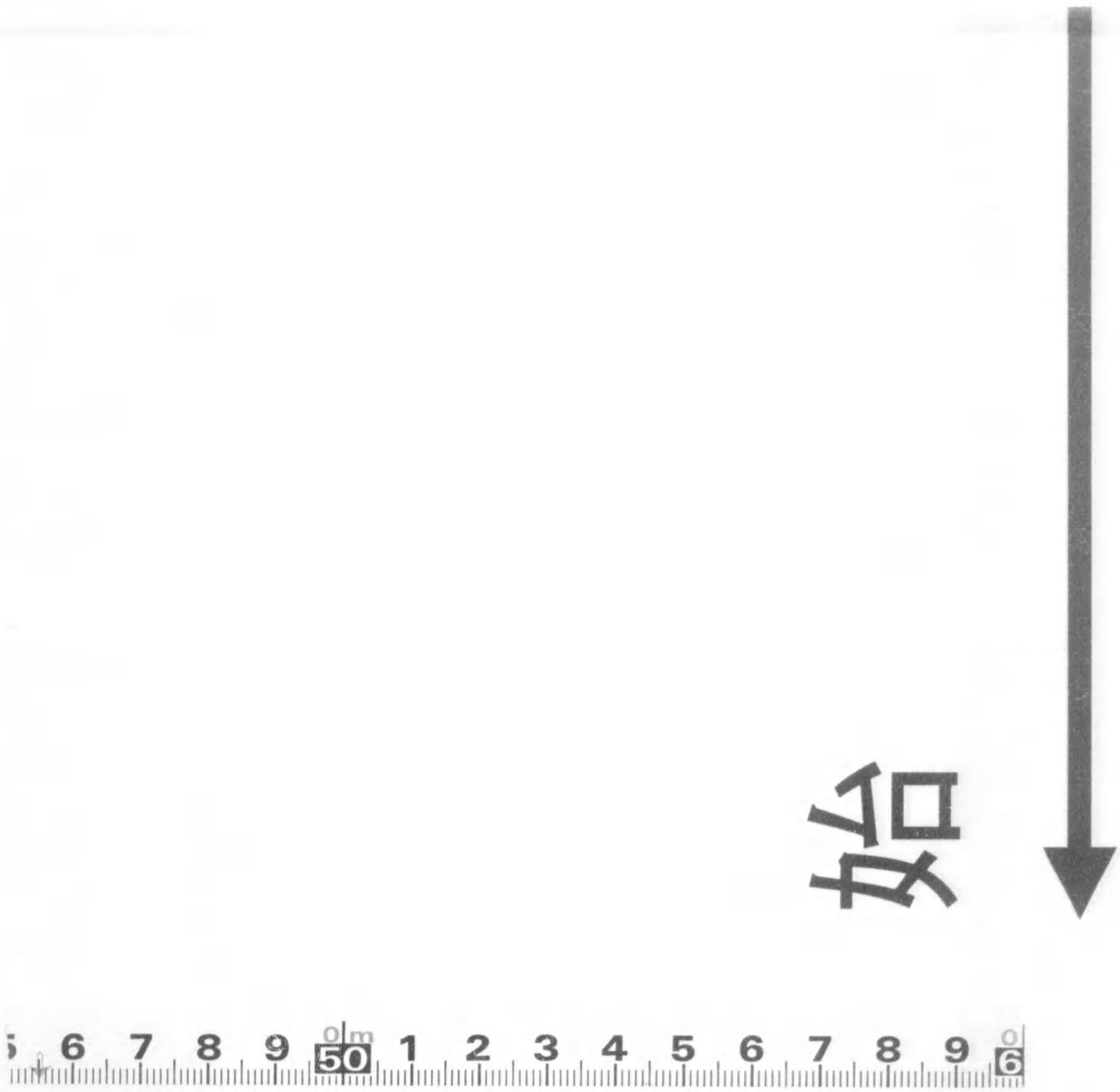
325
543

325-543

宗教生活と社會問題

文學博士
姉崎正治著

通俗大學會發兌
大正
8. 5. 5
內交

序にかへて

昨夏通俗大學會主催にて信州輕井澤に夏期大學を開催したる節、其の最初に於て、姉崎博士に「宗教生活と社會問題」の題下に三日間の御講演を煩はしたり。本書は其の速記錄を講演集第一編として發刊するものにして、博士の御校閲を受くべき筈のものなりしが、折惡しく、此の書發刊に際して渡佛せらるゝことゝなり、出立前到底御校閲の餘暇なかりし爲め、速記飜譯其儘刊行致すことゝなしたり。卽ち字義不徹底等のことは幸にこれを諒せられんことを希ふ。

大正八年四月

編者識

宗教生活と社會問題 目次

第一講　問題の所在及宗教信仰の要素……一
（宗教信仰に於ける重點の變遷）
（工業革命に伴ふ社會組織の變化）
（個人的信仰と社會的活動との關係）
第二講　現代社會問題の歸着……三
（個人の自覺並に權利の主張）
（現實主義と理想主義との對立）
（宗教上より觀たる社會問題）
（社會的結合の必要と其の案配）
第三講　人生の社會的結合に對する宗教の力……三七
（本能的結合、義務結合及理想結合）
（人生の社會的理想と其の人道的發展）
人類の結合に對する理想並に信仰の力

目次終

宗教生活と社會問題

文學博士　姉崎正治講述

第一講　問題の處在及宗教信仰の要素

宗教信仰に於ける重點の變遷――工業革命に伴ふ社會組織の變化――個人的信仰と社會的勤工との關係

此の講演に於て、私は敢て此の問題に對して、解釋を與へると云ふ積りではないのであります、寧ろ如何なる問題があるか、如何なる難問が存在するかと云ふことを主に致したいと思ふのであります。

宗教家の態度として申しますれば、何等かの解決を與へる、或は安心立命の材料を與へるのが宗教家の態度でありませうが、吾々の學問の方の態度から言ひますれば、此事に對して如何なる難問題が生ずるか、如何なる理由で其の難問が生ずるか、又其の問題が現在如何なる事に困難を呈して居るとか云ふ事を調べて參るのが、寧ろ第一着であると思ふのであります。醫者の言葉で申しますれば、治療を加へる前に、先づ診斷をして掛る、現在の症候を檢査して掛る、若し出來るならば其の原因を尋ね、さうして後に初めて治療を施すべきものであらうと思ふのであります。

そこで申上げたいと思ふ問題は、宗教生活と所謂社會問題、若くは社會的生活の關係であります。是が現在に於ける重要な問題の一ッとなつて居ると考へるのであります。事實の例を取つて申して見ますれば、現在の日本の宗教界に色々の活動動搖があります。其の一つは例へば東京の市中あたりで御覽になつて、眼に着くものゝ一つとして道路布教が隨分盛になつて居ります。今迄は寺の中に居つて、鉦を叩いて南無阿彌陀佛を唱へて居つた坊さんが、街の辻、公園に於て道路布教をやる、或は又其他の社會事業、勞働者の救濟とか、無料宿泊所の事業とか、或は感化院の事業、さう云ふ種類の仕事が隨分宗教家の手に依つて起りつゝあるのであります、殊に其の内で吾々の目を惹きますのは、他の宗派にも色々の事業が起つて居りまするが、現在今申した如き、社會的方面の活動を最も良く組織的にして居るのは、恐らくは淨土宗が其の點に

於て他の宗派よりも一頭地を抜いて居ります。此淨土宗と申すのは勿論御存じの方もありませうが、其の宗旨の信仰から言へば、阿彌陀如來の慈悲に縋つて、南無阿彌陀佛の名號を唱へ、西方極樂に往生をすると云ふことを理想とする宗教である。殊に其の宗教の日本に盛になつた時代には、現在を悲觀し、西方極樂を望んで、世の人々の心は大に迷ひ、社會は紊れ、世の中は既に末になつたと感ずるやうになつた。其の時代の思想を言現した歌を一つ申上げますれば「今日も亦暮れぬと鐘の聲すなり生命終はると告げわたるかも」。今日も夕暮の鐘が響く、此の夕暮の鐘と共に、自分の生命は、今日限りになるかも知れない。社會全體の人心がさう云ふ、所謂悲哀の調を持つて、人生に望みを失つた時代に、斯の如き大に

疑ひ迷ひ失望した人心を救ふ爲に出て來たのが、淨土宗であつたのであります。

其の開祖法然房源空は、比叡山に居つて、學問もし色々修業をもした、併し總て自分の心を滿足せしむるに足るものはない、四十歳を過ぎました頃に、阿彌陀如來の信仰に依つて、彌陀の名號を唱へれば、それに依て極樂往生が出來る、此世の中には何等望みはない、頼むべきは西方彌陀の淨土である。其の心持を以て比叡山を退いて、吉水の禪坊に籠つて日に何萬遍の念佛を唱へて居つた。此の法然房と云ふ人は、殆んど他に布教に出掛けたり、他の人に説教をしたりした事はない、唯禪坊に籠つて、南無阿彌陀佛を唱へて居る。來り訪ふ者あれば、其請ひに從つて教へを爲さる、併ながら其

の爲に人を招かうともしなければ、進んで人に法を說かうともしたのでない。然るに、今申した其の當時の世の中の人心が、大に迷ひ、人の心は期せずして、上は皇室の貴き方々から、下は田夫野人に至る迄、老若男女有ゆる階級の人々が、此の吉水の禪坊に集つて、此の法然房を訪ね、南無阿彌陀佛の聲の感化を受けて、此の世界の現在に於ける望を棄てゝ、唯西方彌陀の淨土を望んで安心を得たのであります。要するに淨土宗と云ふのは、斯の如くにして起つて又斯の如き性質の宗敎であります。

然るに其の淨土宗が、明治、大正の今日になつて、寺に引込んで、鉦を叩いて、念佛をして居る丈ではなく、寺に居つては勿論念佛をするが、出ては衆生濟度の道路布敎もやれば、社會救濟の業事も起す。

其の點に於て、他の宗派より淨土宗は、一頭地を拔いて居る、此の一事を見ても、吾々は何ものか其の中に存在して居る、何等かの消息が其間になければならぬと云ふ事を見る事が出來やうと思ふ。

其の他の日本の各宗の事を申上げますれば、種々のことがあります、例へば、今申した淨土宗から出ました淨土眞宗と稱する親鸞上人一派の本願寺の如きも、矢張多少之に似て變化を致して居ります。

然らば斯の如き變化は日本だけの事かと云ふと、不思議にも殆んど世界全體を通じて同樣の變化が起りつゝあります。即ち基督敎の世界に於ても、大體同樣の變化がある、殊に近く百年の間に起つたのであります。今から百年前十九世紀の初めに於ける、基

督教の狀態を見ますと、基督教の問題は總て、個人の救ひ所謂靈魂の救ひと云ふ事に集中して居つたのであります。如何にして靈魂を救ひ得るかと言へば、基督が吾々の救主である、と云ふ根本的の教義、其の他それに伴つて種々の教義がある、それを信條として、さうして教會の命する所の行儀作法に隨へば、それで魂は救はれると云ふ考であつたのであります。現今でも勿論其の問題は何人と雖もまた信じて居ります。所謂個人の救ひと云ふ事が如何に極端になつたかと云ふ一例を申上げて見ますれば、斯う云ふ話があります、是はスコットランドのお婆さんの言つた話になつて居ります。ニユー、イングランド、クレスピーン、詰り新教國のカルヰンの宗教に行はれたのであります。基督教國は、今申した個人

の救ひと云ふ事が、隨分極端の點まで行つて居ると云ふ事を、說明し得る話であります。――それはお婆さんでもお爺さんでも宜しいが――其お婆さんが言つたことで、能く言ふ事であるが、「世の中は段々末になつて皆、人が惡くなつて仕方がない、」殊に是はカルヰン派の國で常に申すことである。又基督教の歷史の二千年の間に時々出て居ります。世の中が次第に末になつて、最後の裁判の時が近附きつゝあると云ふ信仰である。矢張其お婆さんが其の基督教の信仰を持つて言ふに、世界は段々末に近附いて來た、四邊を見廻はして見ると惡人ばかりである、救はれない者ばかりである、即ち地獄に落ちる人間ばかりである、恐らくは此世界の中で、本當に救はれる人間は、自分のお寺の和尙樣――基督教の和尙

さんです――お寺の和尚さんと自分と二人丈であらう、其の中でも和尚さんの方は少し怪しい。と言つたと云ふ話で、要するに自分丈は助かると云ふ事になる。さう云ふ心持になり得ると云ふ事は、先程申したやうに、教會の教へる通りを信じ、其の通りを眞心で受けて、教會の命ずる所の教義を總て守り、禮拜なり儀式なり其他のことを守つて、それで救はれると思ふ。其の心持は外の人にも多少あるかも知れない、最も其の心持を經驗して是でこそ確であると云ふ、心持になり得るのは當人一人、最後の結着は一人になると云ふことは、自然の勢であります。

單り宗教に限りませぬ、如何なる信仰或は主義でも、其の主義なり、或は信仰を固守し、さうして唯それを窮屈に解釋するに從つて、

自分の考へる通りのものゝ外は、總て正しくないと云ふ考になるのは、人間の弱點であります。

日本でも隨分斯う云ふ傾向はある。忠君愛國の教を說く人が、それを窮屈に、形式的に解釋するに從つて、他の人間の忠君愛國は怪しい、自分丈が本當である、少しでも自分と違つたことを言ふか、若くは吾々の如き人間は、亂臣賊子と云ふやうな考の人が、往々にして日本にもある。さう云ふ人々は、吾々の如き事と言ふものは、亂臣賊子ぢゃ言ふのであります、少しでも自分の考と違つた者は正しくないとして、自分の考へて居る、是丈が正しい、唯一の確なものだと云ふ考を持つやうになれば、さうしてそれが宗教の信仰であります、すれば、どうしても斯の如き信仰を持つて此の通り信じ

て居る者の外は、救はれないと云ふことになる、從つて他の人は皆
殘らかの信仰を得て居るであらうが少し怪しい、矢張遂に地獄に
墮ちる者である、と云ふやうに世の中を狹く見て仕舞つて、救ひと
云ふ事を、狹く自分の事柄のみに限つて仕舞ふと云ふ傾向は、世の
中の人間の自然の弱點であります。

百年前の基督教の狀態を見まれば、今申すやうな意味の所謂救
ひと云ふことが、非常に重要になる、個人の宗教は、魂の救ひである、
それより以外には何等の宗教はない、宗教は神と吾々との直き談
判である、もう其の外に何等の媒介もない、さうして、自分は神と直
き談判をすればそれで濟む、他の人は救はれたければ、直き談判を
やるが宜い、一々他の人の世話を燒いたり、救つたりしては居られ

ない、自分一人丈け、早く救はれゝば宜いと云ふ考が、非常に強かつ
たのであります。

然るに、其の同じ基督教の中のカルヴヰンの主義を奉する新教の
方に於ても現在の狀態を見ますると、非常に其の點に於て違ひが
生じて居る。勿論先程申したやうな、魂の救ひを重んずる人は、今
日まだ絶えませぬ。又其の魂の救ひと云ふことを、頗る窮屈の意
味に解釋して居る人も、まだ殘つては居ります。併ながら全體の
傾向を見ますると、宗教のことは、個人の魂を、唯個人として救ふの
でない、社會の一員としての人間を救ふにある。言葉を換へて言
ひますれば、人は各々自から救ひ、自から助けなければならぬ、併し
自から救ふには、他を救ふと云ふことが必要條件で、他を救ふ事に

依て、自からを救ひ、自からを救ふ事に依て他を救ふ――此の點は又最後の時にもう一度もう少し述べやうと思ひます――自分を救ふことと、他人を救ふこととは、離るべからざる雙互条件になつて居ると云ふ種類の考へであります。即ち自分一個丈が、今の正しい信仰の生活をしても、それ丈では、自から救つたとは言へない、其の同じ信仰、正しい生活を、他の人と自分と共々其の道を歩んで行き、互に手を引合つて、さうして其の正しい道に進み神に近附く、是が眞の救ひであると云ふ考が、一般に救ふと云ふ事の内容になつて來ました。自から救ふ事に依て他を救ひ、他を救ふ事に依て自からを救ふ、斯の如き事項を實行するのは、どうしても社會的の生活でなければならぬ。例へば、之を姑く宗教を離れて、現在の吾

々の眼の前に在る實例で申上げて見まれば、衞生事業に於ても、丁度是と同じ變化が起つて居ります。其の衞生事業でも、御存じの如く昔は衞生と云ふ言葉はなく、養生と言はれて居つた。さうして昔の養生は各々自分々々で養生すると云ふ事より外はなかつた。然るに今日になつて見ますれば、自分一人幾ら養生しても、それでは必しも安全ではない、本當の養生、衞生をするには、社會全體でしなければならぬと云ふことは、此の傳染病の研究なり、黴菌の學理が明かになつた今日は、最も明白になつて居る事實で、如何に自分丈が衞生に注意しても、社會全體、に結核菌が撒き散らされて居るならば、自分も何時罹るか知れない、それ故に結核に罹らないやうにする爲に自分自から養生するのは勿論、それと共に社會全

體が衛生に注意して結核菌の撲滅をせねばならぬ、と云ふ事は衛生上明白なことであります。

又それと同樣のことが教育其の他に起りつゝあります、吾々が自分の子供を育てるのに、家庭丈で幾ら氣を附けても、一歩家庭を去れば、社會の勢力が動いて居る、活動寫眞などが色々ある、然らば自分の子供を本當に善くしやうと云ふ事は、家庭で注意すると云ふ必要があると共に、矢張社會全體に、それ丈の注意をしなければならぬ、と云ふことも明白な事實であります。其他、今日現在して居る仕事は所謂社會的生活である、之を良くするには自分も良くしなければならぬが、自分丈良くしてもそれで足るものでない、社會を良くしなければならぬ、社會を良くするには、各自がそれ〴〵

自分を良くしなければならぬことは勿論である。吾々と社會とは互に助け互に離ることの出來ない關係に立つて居ると云ふ事は今日の社會生活に於て益々明白になつて居る。併ながら、未だ衛生にしても、教育にしても、それ等の設備が十分に行はれて居ないと云ふ缺點はありますが、其の點に吾々の注意は段々向いて居る、宗教も矢張同樣であります、自分一人で安心をして居ることは出來ない、自分自からの滿足があるならば、それと共に、社會の同胞に、同樣の滿足を與へなければならぬ、社會の同胞を導き、自分自からの滿足の一分を與へなければならず、又社會の同胞を導くにあらすんば、自からの安心立命を得ると云ふ事は出來ないと云ふ方に向いて來たのであります。斯の如き變遷は、現在の基督教の、種

々の社會事業の上に十分現はれて居ります、私が今此處で一々申す迄もなく、例へば救世軍の仕事を見ても――日本の救世軍の方ではまだ組織が十分でありませぬが、――酒の害と戰ふ爲には、人々に對して酒は惡いものだからあなた方は禁止なさいと絶叫して居る。それ丈でなくして、一つの市から市全體の輿論を喚起して、市全體の事業として、酒の賣買に關する取締に着手しなければならぬと云ふやうな事、若くは又新なる社會事業をやる場合に、救世軍が其の主宰となつて開拓生活をやる、其の開拓には、唯各個人の精神的訓練を加へる丈でなくして、其の團體全體としての規律、訓練の上に於ける宗教の感化を及ぼす方法を廻らしつゝあります。斯の如き狀態は實際の事業だけでなくして、思想の上にも盛に起りつつある事柄であります。之に就ては今一々書物の事などは申上げられませぬが、百年前に出ました基督教の書物と、此の頃の基督教の書物とを御覽になれば、其の對照は著しく分るのであります。百年前の書物は、靈魂の救ひのことのみでみつたが、今日出まする基督教の書物は、殆と基督教思想の書物であるか、或は社會事業の書物であるか、區別の附かないやうな工合になつて居ります。勿論其中には、利害得失は色々あるには違ひはありませぬが、兎に角、斯の如き變遷が百年の間に起つたと云ふことを、吾々は注意しなければならぬのであります。

斯の如く觀察して見まするに、誰にも生ずる一つの疑問は、然らば宗教と云ふものは一體何方が本質になるのであるか、個人の魂

を傳ふ、所謂傳道したり安心立命を與へるのが主なのであるか、若くは社會事業として衆生を救ふのが本職か、何方が本主かと云ふ問題が出て參らうと思ひます。此の問題に對して、私は今日直ちに解釋を與へやうとは致しませぬ、此れに對する私の見解は、段々申上げる機會がありませうと思ひます。此の問題に對して吾々の注意すべきことは一體吾々が何事を觀察するにも、どうも物を固執的、固定的に考へる傾向が多い。今申した宗教の本質如何と云ふ問題に對しても、現在多くの人は、尙宗教に對して固執した考を持つて居る。今申したやうな問題が、宗教と云ふものは個人の救ひを本職とすると固定して仕舞へば、もうそれ以外には何にも不必要なものだと云ふ意味である。若くは其の反對に宗教の事

業は社會的事業であると云ふ見地から見て宗教を固定的に考へると、其の他の安心立命とか、傳道とか、信仰とか云ふことはそれはしなくとも宜い附屬的のことだと云ふやうに考へる。是は單り宗教丈でない其の他の教育に就ても、或は道德に就ても同樣な考へがあるが、それは姑く別問題として、此所で私が此の問題に對して諸君のお考になる材料を、提供して置きたいと思ひます。

宗教は今申した如く、一方に偏して、固定したことは決してないのであります、人生の變化と共に宗教は種々變化して參つたものであります、今日も尙盛に變化しつゝあり、將來も亦變化するものであると云ふ事を見なければならぬと思ひます。之を理論的に申すより、事實に就て申上げて見ませうが、例へば同じく佛教でも

其の一つの佛教が、非常に個人的に感化を及ぼした場合と、社會的に感化を及ぼした場合と、隨分著しき差異が現はれて居ります。先程申した源平から鎌倉時代に掛けての日本の佛教は、主として個人的救濟の宗教であります。然るにもう一つ前に遡つて見ますと、奈良朝の佛教を觀察して見ましたが、奈良朝の佛教は殆ど社會的宗教であつたのであります。勿論奈良朝の佛教にも學問の道もありました、又道德事業の方法も色々ありましたが、其の頃の佛教の生命は、社會事業にあつたのであります。之に就ても奈良朝時代のことを一々申上げて居つては時間を取りますから略しますが、唯一例を申して見ますれば、奈良朝佛教の最も代表的の人は、道璿、行基の如き者で、道璿は、道路を開き、河を浚ひ、運河を造ると云ふやうな仕事を始めた人であります、其の事業を續けて、行基菩薩が矢張同樣の事業を盛に行つた。行基菩薩の仕事は、今申した道路橋梁運河、さう云ふ仕事を盛に到る處で行つたのであります。今日から考へて見ると、日本の佛教家には、さう云ふ人は再び起らぬだらうと思ふ位で、もう一つ大きな仕事は、播磨備前備中備後の今日の瀬戸内海の航路を定めた、さうして、其間に播磨の室津から備後迄の六ヶ所の築港をやつたのであります。其の築港をやつた爲に、交通の上に便利を與へたことは勿論でありますが、それが又租稅を中央の奈良に運び込む上の助けになり、政治上の助にも勿論なつたのであります。行基菩薩は、今申したやうな仕事の外に、今日の所謂開拓事業を盛に致しました、色々な事業をやつた

が其内で尙ほ二點丈を申上げます、即ち到る所の道路の傍に果樹を植えたのです、是は即ち社會的の仕事で其所へ行つて多くの人が飢餓を癒やすやうにしたのは遙に高遠の考へである。昔は到る所に果樹の林檎なり、蜜柑なり各々其の土地の宜しきに從つて植ゑた、並木にずつとさう云ふものゝ果實が生つて居つたと云ふのは、實に麗はしい事で、奈良朝の僧侶は是等の仕事を實際にやつて居つたのであります。其の本を尋ねると、其本は印度にあります、今日も尙印度にはさう云ふ並木が隨分遺つております。それは、佛敎を廣める上に於て非常に大きな仕事をした、阿育王と云ふ王樣が、全國に對して、さう云ふ種類の社會事業を行つて、通路を造り、其の傍に果樹を多く植ゑ、人の止まり休む所には井戸を堀りな

ごした。さう云ふ種類の仕事を、佛敎家としてしたと云ふことが傳つて居る。日本でも奈良朝の僧侶は、斯く如き仕事をしたのであります。もう一つは先程から申したやうに、河を堀り、築港をやつたことであります。さう云ふ仕事をするのに行基菩薩は如何なる方法を取つたかと云ふと、敢て朝廷に賴つたのでない、到る所、必要と見る所に行つて、さうして先づ、道路布敎をやつて、其の村なり其地方の人間を集めて、此の地方に是丈の河を開いたり若くは池を造れば、どれ丈の開墾が出來る、斯の如くすれば汝等の住んで居る村は佛國寶土となる、さうすれば此の國は佛の國となる、斯の如くすれば吾々は樂しく生活し得られる、即ち佛の所謂法界を造り出す事が出來ると云ふことを說いたのであります。そして先

づ人の心を其の方に集め、信仰せしめ、それに依て人心を纏め、其の人等の勢力を藉りて、共同事業として斯の如き仕事を行つたのであります。

其の他にも奈良朝の佛教には申上げる事は多いのでありますが、兎に角佛教にもさう云ふ色々な變遷がありました。殊に日本の奈良朝の佛教の如きは、最も社會的の宗教として活働した一つの時代を劃して居ります。而して其の源を尋ぬれば印度に手本がありました。支那では左程には行はれなかつたのであります。

基督教に就ても同様の實例を申上げることが出來ます。先程申したカルヴヰン派の教への、個人の救ひと云ふことを主とする宗教、個人の魂を救ふと云ふ、個人的救濟の教へは主として宗教改革

以後に出來た思想信仰であります。ルーテル初め十六世紀の宗教改革家の思想は、神と直接談判をやると云ふやり方でありました。從つて其の信仰は先程申したスコットランドのお婆さんの如く極端なる傾向を皆持つて居ります。然るに、其の前に遡つての宗教改革を見ると、中世紀の基督教は、此の方面に於ては、宗教の勢力が所謂社會的勢力で、中世紀の歐羅巴は、事實上數百の國々が封建割據の世の中であつたのであります。即ち政治上に何等の統一もなかつたのであります。然るに其の數百の諸侯の國全體を統括し、綜合的の歐羅巴全體に統一して、社會的氣風を與へたものが即ち基督教の教會でありました。此の時代に教會の勢力が如何に大きかつたと云ふことは、例へば神の平和の日と云ふ一の

習慣にも現はれて居ります。さう云ふ封建割據の世の中でありますから、到る所隨分戰爭はあつたのであります。然るに其の間にも、金曜日には休むと云ふことは、即ち神の平和の日と云ふ金曜日には戰爭をしないと云ふ不文律でありますが、それが自然行はれて居つて、それを破つたものは、教會から破門されるのでありますの。併しそれよりももつと重大なのは、歐羅巴全體を通じて、例へば教育の如き同じ種類の教育が行はれた。言葉は各國違ひますが教科書に書きますのはラテン語である、一方の一つの國の學生が、他の國の學校へ行つても決して差支ない、教會の言葉學問の言葉は總てラテン語を以てやる、從つて學生は彼方の國、此方の國と彷徨ふ、日本でも昔は學生は笈を負ふと、彼方此方と歩いたのであります。又所謂修道院と云ふものゝ組織が、歐羅巴全體に及んで居りまして、縱令如何なる團體の者でも、修道僧は歐羅巴全體を殆ど何等の準備なしに旅行することが出來た。此點は日本でも、禪宗の雲水坊主が全國何所の禪宗寺でも歩いたのと同じであるがさう云ふ組織が歐羅巴全體を通じてもつと盛に行はれて居つた譯で、さうして、それ等の修道院は各地方に於て、其の土地の殖產工業の一つの中心になつて居つたのであります。其の殖產工業は主として葡萄を作ることゝ牧畜とであつたのであります。お寺が皆之をやつた、今日でも其の跡が殘つて居りまして、歐羅巴の修道院に參りますれば、其所に特別の名物の葡萄酒、チースなどが、我國でも各々其の所々に名物があると同じやうに特別の名物があ

ります。それは皆、元修道院が其の地方の産業を起した時の遺物であります。さう云ふ産業も興し、さうして、其の地方を開き、又學問の中心にもなれば、宗教の中心にもなる。さう云ふ工合にして、教會の機關が歐羅巴全體を通して、網の目を張つたやうに、全體に一つの社會的統一をして居つたのであります。それ故に其の時代の基督教としては、唯個人の魂を救ふと云ふ事だけで、個人が救はれるには、教會の會員となり教會の善良なる會員として、生活することを必要條件としたのであります。

中世紀の基督教は、此の點に關して教會以外には救ひなし、教會を離れて一人救はれるものでない、教會全體として、其の教會に屬する會員となつて、神に救はれると云ふ考へであつたのであります。

「其の他斯う云ふ種類の實例を申上げて來れば有ゆる方面で擧げて來る事が出來ますが、要するに宗教は其の時代に依り、其の國に依て、個人の救ひを中心とし、其の方に重きを置いた場合もあり、又社會的の事業に重きを置いた場合もある、此の二つの一方のみが宗教の本質と限ることは出來ないと云ふ事に止めて置きます。宗教それ自身の觀察は是だけにして置きます。」

そこで、現在の社會、殊に百年以來の世界文明が如何なる點に、最も著しき變化を呈したかと言ひますれば、恐らくは社會的生活の變化であらうと思ひます。即ちそれに伴つて生じて來る社會問題の實行であらうと思ひます。是は、日本は明治以後の事であります。

ますが、日本に取つては六十年來の變化である。それが歐羅巴の社會では百二三十年來の變化として起つたのであります。

一寸之に就て附けて申しますが、日本が明治以後長足の進歩をしたことは世界に其の比を見ない、と云ふやうな事は能く人の言ふ事であります。或る點に於てはさうであるかも知れぬ、併し此の點は餘り買被つてはいけない　日本は明治以來六十年の間に、ゑらい變化はしたけれども、隨分其の中に昔風が遺つて居る。併し是は兎に角、五六十年の變化は著しいものであるが、此の五十年間の著しき變化が日本丈かと云ふと、アメリカの如きは今から五十年前は實に憐れなものであつたが、今日は彼の如く盛になつて居る。今度の戰爭に關聯して、太平洋の沿岸は、殆んど總て造船所

になつたと言はれる程、盛に事業が起つて居る。西海岸のカリフォルニアの如きは、丁度五十年前の時代には、所々に少し宛の冒險家が出掛けて行つて仕事をする位で、汽車電車の道も勿論ありはしない所でありました。然るに、五十年來の日本の變化よりも、もつとゑらい變化をした。又話は少し飛びますが、此大正七年三月にカリフォルニア大學が創立五十年の祝をしました。私も行つて參りましたが、彼の大學が五十年前の創立でありまして、而かも私は十年前にも行つたことがありますが、極く最近の四五年の進歩と云ふものは非常なもので、日本の大學を見て、何だか世界屈指の大學だとか、世界の大きな大學と肩を列べられると思ふことは、日本に居る時だけのことで、カリフォルニア大學の此の四五年間の進歩彼

の變化と、其の意氣込を見ては、日本の吾々の居る大學の如きは二十年も三十年も後れて居ります。此の頃大學の改革の問題が現はれ色々の議論をする人があり、自分も言つたりするが、成程日本は、鳥なき里の蝙蝠で、世界の最高の學校から見ると、お話にならない。兎に角此の五十年間に於ても西洋諸國の如き進歩はやつて居ない。唯日本が自國内の事丈を見ればゑらい變つて居るやうに見えるが、其の進歩の實質と云ふものは甚だ少ない、アメリカは今日のヨーロッパの、此の五十年間の進歩より、もつとゑらい實質ある變化をして居ります。兎に角世界全體として、現在の進歩は最近百年來の變化であります。其の變化の起つたことに就ては種々の原因事情があります。併しそれを今一々説明するには一

日も掛りますが、其の中で最も中心になる、最も重大の勢力となつたのは何かと云ふと工業革命で、此の工業革命の起つたのは、即ち蒸汽機關の發明が本だと云ふ事は申す迄もない。

丁度フランス革命に先立つ五年千七百八十四年に、ワットが蒸汽機關を發明した。それを少し變形してスチブンソンの機關車が出來ました。ブラッセルの帝國博物館に陳列してある、玩弄物見たやうなあの機關車が、それより百年以後の世界全體の進歩を爲す大原動力となつたのであります。其の一番本を尋ねると、ゼームス、ワットが自分の部屋の土瓶の湯が沸つてブクブクするやつを見て、之を何ものにか使はうと考へたことに始つたことで、ゼームス、ワットの部屋の土瓶の沸くことが始めで、世界を是丈變化

させたのであります。此の影響の及ぶ所は、獨り有形の方面のみならず、無形の方面の、道德、美術有ゆる方面に變化を與へたのであります。又今私が此の講義に於て殊に申上げたい社會問題、それに關聯した宗教問題、是れ又一面から言ひますれば、此工業の革命が此所まで及んで居るのであります。此の工業革命の本は主として蒸汽機關の發明である。其の汽車汽船と云ふものがなかつたならば、今日の世界は全然違つた世界で、世界は東海道五十三次を歩いて旅行したやうなものである。

千七百八十四年にゼームス、ワットが蒸汽機關を造つた其の三年後に、彼の佛蘭西の博物學者キユービミンと云ふ人が科學に關する講演をやつて居ります。其の内に此の蒸汽機關を若し船に

應用したならば餘程面白からう、さうすれば、風は無くとも動き、潮に逆つて動くことも出來るから、帆は無くも宜い船が出來ると云ふ事を、當時の第一流の學者が、今から僅か百三十年前にさう云ふことを言つた。僅か百三十年前の第一流の學者のキユービミンと云ふ人が言つたことを、今日吾々は當り前の事と思つて居る。

又レオナルドと云ふ人は、飛行機を造らうと云ふことを空想として考へて居つた。所が是は空想でなく事實になると云ふ迄に變化して來た。さう云ふ變化に就て一々申す必要はないが、此の工業革命が與へた變化を、社會的の方面から見たことを、之を便宜の爲に算へ上げて見ませう、算へ上げると云ふよりは唯それを便宜の爲に少し分けて申上げて見たい。

即ち第一は、之に向つて組織的にする必要が起つて來た。何となれば工業革命の結果として總ての仕事をするに、大仕掛の機械を使ふ爲には第一資本の合同が必要である、それと共に工業も組織しなければならぬ、各々自分々々が勝手な仕事をしては居られない、機關の何所の部分はどの人、何所の機械は誰と其部分々々の仕事をちやんと極めて掛かる、資本を合同してさう云ふ組織をする必要が起つて來る、是が益々大きくなつて來て居ります。即ち此の點は今日の經濟上の事柄は吾々素人が考へても其の組織をしなければならぬと云ふ事は言ふ迄もないことであります。組織の必要と云ふことは、即ち社會的動作をすると云ふ事と同じことであります。人々が違ふ

考を持つて、銘々勝手な事をする、人は各々自分の個性は具へて居る、併ながら或る點に於ては考を一つにして、さうして共同動作をすると云ふ必要が生じて來る、是の最も直接なる一つの原因は蒸汽機關の發明に係て起つたのであります。

第二は利用厚生の道の普及であります。申すまでもなく、蒸汽機關が段々利用が進むに從つて、交通の便利が開けて來る、工業の材料も遠い國から持つて來る事も出來る、印度の棉をイギリスに持つて行く、さうして之を大仕掛で糸にする、それから今度は之を各國に供給する、それと同樣に日本と印度の間に於てもやる、其の他總ての工業品を斯の如くして盛に製造することが出來る、そこで物が安くなると云ふ、所謂利用厚生の道が起つて來た。是又一

々申す迄もない事でありますが、之にも利害は伴つて居つて、其の爲に人間が安い物を好むやうになつて來ると云ふ弊もある。日本は植物から取つた麗はしい染料を使つて居つたのが、近年獨逸から來るアニリンと云ふ色素を使ふ爲に、其の品が安ぼくて、色は褪め易い物を拵へると云ふやうな事もありますが、兎に角斯う云ふ利用厚生の道が普及して來た、之に伴つてどうしても人情一般の要求が增して來るのであります。昔の時代ならば到底及ぶことの出來ないと思つて居つた物も、多くの人民の手に入つて、多くの人間が種々贅澤な物を得る、從つて其の次々々と慾望が殖えて來ると云ふことは、自然の勢であります。例へば、私の祖父などは毛織物などは着たことはなかつた木綿の綿入で冬は震へて居つたもので、毛織物などと云ふ贅澤な物はない、然るに吾々は毛織の着物を着る、毛織のシャツを着る、さうすると今度は綿の入つた物は何だか心持が惡いと云ふやうになつた、其の他さう云ふ種類のことは衣食共に幾らもある。是は無形の方面に於ても同樣であります。私の祖父は明治五六年に死んだのであります――何も祖父のこと迄申さぬでも宜いが――、其の時分世界の事を聽いて驚いて居つたのであります、是は誰もさうだらうと思ひます。然るに私は子供の時に英語を習ひ初めて、一年許りの內に四五冊の英語の本が本箱に出來た。其の頃には西洋綴じの一冊か二冊の本を持つて居ると非常な誇りで、そんなことで私は子供の時に之を非常に喜び誇りにして居つた。然るに私の子供は幾ら西洋綴

の本を買つてやつても平氣で居ると云ふやうに變つて來て居る。それから讀物にしても同樣であります、私の子供の時に讀んだものとは非常な相違が出來て居る、吾々の讀んだのはロビンソンクルーソーなどを何でも讀める力のある丈讀ませる。之に依ても其の頃の事は想像が出來ます。さう云ふ有形の方面の利用厚生の道が進んで來るに從つて、無形の方面に於ても同樣である、之に依て世界の智識を得る事が出來る、從つて其の方面に對する智識慾を增進すると云ふことは自然の勢であります。

第三には一般の敎育の增進普及であります、是は第二の利用厚生とは勿論密接に關係して居ります、敎育の普及と云ふことは、矢張是は海外からの刺戟と云ふものが、非常に大きな力になつて居

ります。世界の交通が開ける或は其の間に交通が行はれる、競爭も行はれる、そこで敎育は其の方面から刺戟を受ける、敎育の普及增進に從つて民心は一般に刺戟が增進すると云ふのは勿論のことであります。是れも一々說明する迄もなく各自各々の權利で有形無形共に今までよりは增進すると云ふことは、自然の勢で、例へば無形の點で言へば、今までの子供ならば親が是は斯うだと言つてやればそれで滿足して居つたものが、一般の敎育制度が進み刺戟が多くなるに從つて、子供と雖も是は斯うだと言はれても滿足しない、尙一度探究して見やうと云ふ心を起して來ます、勿論子供は或時期には非常に好奇心の强いものでありますが、今日の社會は又非常に好奇心を刺戟する事が殖えて居ります、從つて各個

人が各々自分の力を利用し、智識を進むる權利を要求する心の增進することは勿論であります。

第四には是又今の二つと勿論關係して居ることであります、世界の交通の發達するに從つて、其の交通の必要が增進して來たと云ふ事であります。其の交通の發達する一方には先程申した利用厚生の物資を供給する、互に有無を交換すゝと云ふ方面には同樣でありますが、同時に無形の方面の智識を交換し聯絡をすると云ふことの大きな勢力になりつゝあります。又それのみならず此の交通の發達の結果として世界全體に、一方には有ゆる競爭が起つて來ます。人間の接觸することの多い丈、競爭する機會が多くなる、併し同時に聯合する機會も多くなるのであります。此の

事は別問題でありますが一言すると聯合が多い程競爭が多くなる、競爭が多くなれば聯合も多くなる、接觸する機會が多くなれば、競爭することも聯合することも多くなります。何れにしても、此の事は世界全體の接觸が多くなれば、現在も多いのであるが將來にも益々增進して來るのでありますが、其の間に此世界全體を通じた一つの社會的氣風と云ふものが、自から生じつゝあるのであります。此の點に就ては此所では極く簡略に申上げて置きませうが、例へば先程申した結核撲滅のこと一つでも、一つの國丈で幾ら結核撲滅を實行しても、結核は國境を侵して世界中何所へでも行くから、本當に結核菌の無いやうにするには、世界全體でやらなければならぬ、そこで世界全體に結核の豫防の聯合も起らなけれ

ばならぬ、又黴毒もそれと同樣に、是は一方の人間で止めても、其の人間が他と交通しない譯に行かないから、矢張其所へ行つて傳播するから、是も世界全體で止めなければならぬ。是は衞生の方のことでありますが、さう云ふ事に至る迄もさうである。其の他學術上のことも、世界全體の聯絡を必要とすることは說明する迄もない、交通の盛になる結果善い方面のことも、惡い方面のことも殖える、從つてそれに對して方法を講じなければならぬ、それは世界的に講じなければならぬ、それで斯の如き氣風が唯獨り今申した衞生上の事丈ではない、もう一つ敎育問題に於ても矢張同樣の點がある、例へば靑年期の研究の如き、各國民衆の社會、氣風狀態の異なるに依て多少の違ひ點がある、けれども靑年期の研究が各國で

やつてそれを合せると云ふと、世界で同じ所があることを發見する。例へば宗敎の問題に致しましても、一寸男子に就て言へば、十五六歲から十七八歲の靑年期に精神の動搖がある、此の時には身體的の變化も起れば、精神的の變化も起り、其の間には又宗敎心の動搖も起れば、道德上の色々の煩悶も起つて、精神動搖期の人間は一個人としても重大であります。其の變化は個人の事情、社會の事情に依て多少の相異はある、然るに世界各國は何所の實例を見てもまだ極めて不完全ではありますが、存外全體としては同じものがある事を發見する事が出來る、左樣致まして、實際の事業として起つて居るのは世界全體を通じた宗敎敎育の聯合であります、日本はまだ之に十分參加して居らぬのでありますが、人間の宗敎

心を養成するには、如何なる方法を執るが最も適當か、其の場合に唯議論或は抽象的の理論のみでなく各國を通じた、青年期の人間は如何にしなければならぬ、と云ふ事が其の間にありまして、宗教教育を如何に施すべきかと云ふ問題になります。其の爲に現在の世界全體を通じた聯合が出來て居ります。研究も出來て、西洋に於ては教科書編纂の如きも、世界全體を通じたものを拵へる聯合をやつて居ます。其の聯合の爲に千九百十四年に會合を開く準備をしたのが、戰爭の爲に今日迄まだ開かないで居るが、即ち世界の交通の結果接觸が多くなり、從つて世界各國が共に互に影響する、現在に於てすら斯の如くである。政治上の區劃を越えて自由に世界に交通が行はれて居る、さうして茲に世界全體を通じた

社會的氣風が勃興して來ます。

先づ工業革命の結果百二十年來の世界に起つた、色々の問題に關係する方面から見て大體四ッとして申上げたのでありますが、又之を一ッにして見る事も出來るし、又もつと細かく分けることも勿論出來ます。是等の變化を綜合して見ますると社會的氣風の勃興が一ッの大きな特徴になつて居ります。勿論一方の國家の福利を增進する、若くは政治上の問題の如きも重要なものでありますが、一方に於てはそれと共に必しも政治的區劃政治的の分ちと一致しない、世界全體を通じた社會的氣風が生じつゝあると云ふ事であります。但し世界全體と申しますが總ての運動が世界的に限ると云ふのではない、勞働問題の如きは勞働者の側に於

ては此の問題を資本主對勞働者の問題として、所謂クラシイとして觀察して彼等の今迄取り來つた政治上の國家の如く、勞働者を世界的に聯合し世界的に勞働者全體が一ッの階級として所謂一方の資本主と云ふ階級に當る。是が彼等の思想である。それの利害得失は今申げませぬが、さう云ふ意味に於ける勞働者の世界的聯合も今まで生じつゝあるが、近來戰爭の爲に一時廢つた。併ながらさう云ふ社會的氣風の發達は世界全體を通じて生じて居るが、是又必しもさうと限らぬものも出て來ます。例へば日本國內に於て今各地に青年團と云ふものが出來て居りますが、若し、あの青年團と云ふのが日本の青年の間に自然に要求が起り、さうして、青年の間に自發的に共同して起つたものならば、日本國內丈に

一の社會的運動が起つたとして喜ぶべきであるが、現在の青年會なるものがどうして起つてどう云ふ者が息を吹掛けて居るか、それは存じませぬが、兎に角是が自發的に起つて來たものならば或種類の目的を以て集つて、さうしてそれに依て仕事をすると云ふ氣風のある、團體として生じたとすれば、其所に社會的氣風が生じて居ると看做して宜い、其の人の一部分は又世界的に聯合すると云ふ魂を持つて居るのであります。又例へば是又今の青年の間にトルスイト研究の團體と云ふものがある。是は別に上から息が掛つて居るのでも何でもないのであらうが、青年の間に熱心なるトルストイ研究者がある、他の國にも是と同樣の熱心なるトルストイ研究者がある。或は又イスペラントの流行があると、中谷

君と共に之を熱心にやる者が出來る。日本にも兎に角イスベラントの團結が出來ると、世界の他の土地に於ても同樣の團結をやつて居る者がある、要するに世界の種々の方面で思想主義の上に於て自分の思想と同じ言現はし方をする者があれば、其の思想主義を同じくする者と共に交通することを慾するものであります、其の交通が出來れば其所に組織が出來る、さうして團體が出來れば其の團體は必しも政治上の國境に依て限られるものでない、是は世界的に聯合し得るものである。さう云ふ種類の氣風が組織的に仕事をし各個の個人が各々思想とする所のものを世の中に傳へて行くと、それが或場合には世界的に聯合すると云ふ社會的氣風は、現在の文明の産物の一つとして又最も重要な産物の一つとして現はれて居るのであります。其の目的とする所は種々あり其のものは時に從つて變化はありませうが、兎に角人間の團結的生活に强制的自發的共同を重ずると云ふ氣風が、茲に社會的氣風として生じて來たのであります。是が世界全體を支配する勢力で、又將來すべき大勢力であると考へられるのであります。之を總括して假りに社會的氣風と申して宜からうと思ひます。

そこで斯の如き社會的氣風と所謂宗教的生活の關係如何と云ふ問題になります。で其の關係如何に就て先程から申しました、過去百年の宗教を見まするとと、丁度今申した社會的氣風と反對の方向に走つて參つたと思ひます。今日は宗教の範圍に於ては此の過去百年間の傾向に少し反動的の社會的氣風が起りつゝある

時代と申して宜からうと思ひます。詰り社會的氣風を帶びた宗教と申さないでも、社會的の氣風を持つて來た、それ等を今迄の宗教と對照して見やうと思ひますが是も箇條別けにしてざつと申上げやうと思ひます。

第一は目的の上に於て餘程の違ひがある。先程から申したやうに、今迄の宗教は佛教も基督教も目的に於て個人を救ふことを目的にして居つたのであります。然るに今申した現在の世界文明に起つた社會的氣風から社會生存をなし、人生の目的は社會的救濟にあると云ふ事になるのであります。即ち個人的の救濟社會的の救濟の對照が茲に現れて來る。

第二は方法の上から申しますれば、其の目的を達する爲に、今迄

の宗教は教權を持つて救世をしたのであります。教會が斯の如くすべしと教へる神の御教へは斯の如くすべし、佛の教へは斯の如くすべし、之を信じたものは即ち救はれる、と云ふ事になるのであります。佛教も基督教も此の點に於ては同じであります。唯教權と云ふものゝ解釋或は主體が場合に依て多少違つて居りました。例へば日本の眞宗の如きは、阿彌陀如來の慈悲に縋つて行くと云ふ、其の心で教を受ければ即ち救はれる。併し其の主義とする其の教へは何所から湧き出るかと言へば、本願寺の法主樣のあの教へを奉すれば救はれると云ふので、常に本願寺の信徒は、自力門他力門を唱へた、宗祖上人を大善智識として、其の教を受けてそれに依て、其の通りを信ずれば救はれる。要するに教權が本に

なつて居ります。然るに今申した現在の社會的氣風に於て、それも必要と致しまするが、自發的救助を基礎にすることを要求する何事も各自自身が各々自分の心根から出て、自分の思想信仰或は主義を貫くと云ふ傾向がある。其の結果同主義同信仰の者が共同する、或は信仰を同しくする者、利害を同じくする者が共同すると云ふ事が、全體に必要になる、又さうでなければ人間は滿足しない、自發的教樓、自發的共同が現在の氣風であります。

第三に今申した結果として、信仰の中心となるものは、今までの宗教より申しますれば、特別に一ッ一ッの教義があります。それを宗教の中心とする教義が定つて居る。基督教で申せば、基督が十字架に架つて身を殺して仕舞つた。其の身を殺したことに依

つて吾々の罪を購はれる、それで吾々は之を信ずれば救はれる、それ故に基督教は斯の如き意味で基督を救主として信仰する、此の信仰が中心點である、それを信ずるのはさう云ふ特別の教義を信ずるのである。又佛教の眞宗で申しますれば阿彌陀如來の實行した總ての慈悲は、南無阿彌陀佛といふ名號に籠めて置かれてある、それ故に其の名號を有難く思つて南無阿彌陀佛と唱へることに依て救はれる、是が眞宗の教義である、之を一般的に纏めて見ますれば南無阿彌陀佛と云ふ名號の中に總ての善が籠つて居ると云ふ一つの教義に歸して仕舞ふのであります。さう云ふ工合にそれ〳〵の宗教には、特別の教義と云ふものがある、然るに現在の社會的氣風に於ては斯の如き特別の教義を必しも必要としない、

否な之に固着することを認めない人間の天性を自由圓滿に發達することを目的とするやうになつて居ります。吾々が自分の生活に處するにそれ自身に一つの教義を定めてそれを信すればそれでも宜い、或は基督教を信じ、南無阿彌陀佛の名號を唱へて、萬全の功德とすれば、それを以て安心立命を得られる。さう云ふ種類の人もありませうが、大體に世界的氣風を帶び現在の社會的氣風の中に棲息すれば固定的の信仰の一點で滿足することはどうも出來ない、吾々の精神は常に流動的で精神の進歩變化に非常なる興味を吾々は持たざるを得ない、固定した精神に對しては吾々は滿足することは出來ない、流動して進んで行く方に滿足を求める、今日は如何なる方面に流動して居るか、それは又別問題になりま

すが、兎に角今までの固定したことでは滿足出來ない、流動的進歩的或は進化的精神で進んで行くと云ふ事になるのであります。

第四には全體に總括して申しまするとと云ふと、今までの宗教の理想で申しまするとと、或は結果と申しても宜しいが、直接的現世的のものではない。現在を離れると云ふものもあり、勿論色々の變遷もありましたが、大體に於て現在を離れる、或人から言へば西方極樂淨土、十萬億土などと云ふのはどう云ふ風に計算を立てたのであるか、何れにしても此の世界は御免を蒙りたいと云ふ眞宗の信仰は、之に依て安心を與へたのであります。基督教も矢張同樣であります。先程のスコットランドのお婆さんのやうなのは少し極端でありますが、さう云ふ宗派があります。それならば現在

を離れたいと云ふ信仰を必要とする教義があるからと言つても、兎に角さう云ふ意味の現在を離れることを目的とする結果として、吾々は幸か不幸か現實的生活に執着して進む力が多い、其の方面の要求は頗る強いと云ふ事は茲にも大分現れて居ります。斯の如く對照して見ますれば百年來の個人救濟を中心にした宗教は、現在の社會的氣風とは其の間の距離が遠いと云ふ事を吾々は見なければならぬ。是に於て今迄申上げたことを總括して問題としますれば、結着は斯う云ふ事になるのであります。所謂宗教信仰と社會的活動とは離るべからざるものであるや否や。或は或種類の宗教家、若くば教育家の見る如く、此の二つを出ない場合のものであるか。もう一つ言葉を換へて言へば、宗教信仰は所謂

個人の心靈に徹底することを要する、個人の心靈を救ふと云ふ意味は如何なる內容に依て救はれるか。と云ふ事が茲に問題になつて居ります。個人の心靈を救ふと云ふことが、必要とすれば、其の最後の救はれる個人の心靈の內容には、社會と云ふことを離れて總て救はれるか、若くは社會的と云ふことを離れ得ないか、茲に問題があるのであります。要するに現在に於て、今までの宗教を見れば頗る個人的にして居つて、個人の救ひと云ふことを重ずる、其の爲に多くの人は宗教と云ふものは個人の安心を得ること丈が宗教だと考へて居る、其の考へからすれば現在の文明の進歩は宗教とは全然反對になる。併ながら一方から見ますれば先程申した如く、宗教は今まで斯の如く固定して居つたかと云ふと、必しも個

人的に限つたものでない、宗教の中にも今まで實際上に社會的勢力を發揮したものも存在して居る。是が果して宗教の本分であるや否や、若し本分であるとすれば、現在起りつゝある種々の社會問題に對して斯の如き意味に於ける宗教が、如何なる光を與へやうとするか、如何なる指導力を持つて居やうとするか、此所に問題があることゝ信ずるのであります。

第二講　現代社會問題の歸着

個人の自覺並に權利の主張——現實主義と理想主義との對立——宗教上より觀たる社會問題——社會的結合の必要と其の案配

前講に於いては大體現代文明に對する、宗教の困難なる點を申述べて置きました。本講では其の所謂社會問題の中で殊に社會的正義の問題と宗教との關係に就て申述べます。所謂社會問題は種々の方面がある。其の間の事情頗る復雜致して居つて、經濟事情、政治上の運動、人間の氣風の問題、家庭の問題、社會風紀の問題

或は又衛生の問題なども、社會問題の一部分となつて居るのであります。それ故に所謂社會問題を有ゆる方面に亘つて分析し始めますれば、非常に廣い問題になるのであります。併しそれ等を概括して見ますに、前申した如く、殊に現代に於ける問題が重要となつて來た原因は、要するに多數人民の覺醒自覺と云ふことが原因になつて居るのであります。多數人民が各自の品格を自覺する、從つて自分の生活に對する要求が增進する、他の社會と較へて、即ち少數の富裕なる階級若くは特權を持つた階級と比較して、自分等自から大多數の人民は多くの特權を有して居ない。それに對して不滿である。其の不滿を推進めて一般人民も矢張同樣の特權を享有するやう、主張するやうになつて來たのであります。

殊に一般人民と申しても、現代文明の勢力に依て、大規模の工業の起つた結果として俄に數の增して來た勞働階級であります。勿論此問題は、日本に於てはまだ切迫したと云ふ程ではないのであります。他の工業本位國のイギリス、ドイツに較べて見ますれば、所謂勞働者の數は頗る少ない、日本ではまだ、彼等の要求もヨーロッパの國々程には進んで居ない。併ながら、五十年前と今日とは、特に最も著しい差別がある。矢張工業勃興に伴つて勞働者の一つの階級が數に於ても今後益々殖えて來る、又彼等の自覺覺醒も段々進んで來ることは、どうしても防ぐことの出來ない問題であります。別の事のやうでありますが、例へば現在東京の中流家庭で困つて居る問題は下女の拂底である。何故に下女が拂底する

か、其の多數が今までは下女奉公をした者が、工場に出て行き賃金を取る勞働者階級になつて居ります。勿論多くの下女奉公をする者は、一つの勞働者でありますから、一つの階級として今迄あつたのであります。然るに今は女の若い者が勞働者と云ふ一つの階級を造りつゝあります。男子の方面に於ては勿論の次第であります。昨年以來日本で國内のストライキの起つた數も少くない、其のやり方が如何にも正々堂々として居る事だけを見ても、假令其の數は少ないにしても、日本に於ける勞働者の階級にもストライキの起りつゝあることを認めなければならぬ。又是が將來益々多くなる事も、今日から豫期しなければならぬ問題であります。

そこで其の内容を一々申すことは此所に於ては略して置きますが。斯の如き勞働者、廣く言へば一般人民の各自の權利思想が強くなつて來る、其の思想が即ち社會正義の要求となつて現はれて來るのであります。

其の思想は、政治上に於ては所謂普通選擧の要求となつて、先づ現れて參つたのであります。ヨーロッパ諸國に於て、普通選擧は殆ど總ての團體に於て絶叫して居る問題であります。ドイツの勞働者は別であります。是は現在殆ど革命にも及ぶべき大問題になつて居ります。日本ではまだ問題にならないのでありますが、一般人民の覺醒と同時に普通選擧の要求は離るべからざる關係を以て居る。日本にも起つて來るに相違ない、起りつゝあるも

のと信じます。要するに政治上に於て平等に一般の人民が總て同樣の發言權を持たうと云ふ主張であります。

又經濟上から見ますれば、即ち是が分配の公平を要求する運動になつて居ります。即ち現在の俸給組織に於ては資本家と云ふ階級が大體に工業の仕事の根本を握つて居る。そこで勞働者は唯一定の賃金を貰う丈で其の工業の繁昌に依て、若くは物價の高くなつた結果に依て事業に餘分の利益を生じても、分配は勞働者の方には多少及ぶ場合もありませうけれども、それは殆ど恩惠的に及ぶ位で正當の權利としては、資本主が之を握ることになつて居ります。現に日本でも五割六割甚しきに至つては名義は違つたのを附けても、七割の配當をして居る會社すら出來て居ります。

斯の如き狀態の下に勞働者は一般の會社側に對して經濟上の富の分配、利益の分配を要求すると云ふ事の起つて來るのは自然の勢であります。要するに經濟上から分配の公平を要求するのであります。但し此問題は日本では勞働者丈に限らない、役人階級の者又は吾々教員階級の側から分配の公平を要求する、吾々も勞働者の一人で資本主の側に屬しない人間であります。

一般に社會的に申しますと現在は斯の如き階級の側から一方の資本主階級と、一方は勞働者階級若くば政治上から言ふと投票權を持つて居ない者とは、日本の如きは是が非常なる不公平な分配になつて居ります。日本全國で投票權を持つて居る人間は人口の幾割になつて居りますか、百分の一位にしか當らないのであ

ります。兎に角さう云ふ一種の階級が種々の點に於て出來る。其の階級の異なるに從つて財產の分配が異なる、是は先程申した利益の分配と遺產相續の問題であります。或は財產に依り若くは社會上の位置に依て敎育を受ける機會が異なる、能力のある者でも貧民階級に生れた爲に高等敎育を受ける事が出來ず、それ丈の才を伸ばすことが出來ぬと云ふやうな弊は隨分あります。天は多少公平なもので、幾ら金持でも馬鹿は矢張馬鹿でありますから、其の方は已を得ないが、自分が馬鹿であるのは仕方がないとしても、非常に能力のある天才の人間でも貧民に生れた者は其の才を伸ばすことが出來ないで居る場合が隨分多いのであります。從つて又職業に就くにしても同樣であります。初めから其の特

權のある階級に生れた者はそれ程ゑらい人でなくても立派な職業に就くことが出來る。然るに其の反對の者は自分の才能に應じた職業に就くことが出來ないと云ふ社會的の弊が隨分あります。此の點は幸に日本ではそれ程の弊害はまだないのでありますが、隨分此點に於て西洋諸國は弊害がある。其の爲に諸種の不幸を來して居る例は澤山あります。一つの例を申せば日本ではドイツと云ふ國は何でも完全になつて、ゑらい國と思つて居る人がある。諸君の中にも或はさう思つて居る方がありませうが。ドイツは弊害のある點も隨分多いのであります、殊に又職業に於て人類の區別、階級の區別が非常に多いのであります。例へば陸軍に於ても士官になれる者は、今までの土豪、日本で申せば鄉士と

云ふやうな者がなる、さう云ふ階級の者でなければ士官にはなれない、日本の陸軍にはそれ程の別はありませぬ、併し閥と云ふものはありませうが、それ程ではない、若くは人種の別でありますると、ユダヤ人種はドイツに隨分澤山あつて中々有力であるが、ユダヤ人は諸方面で排斥されてゐる、殊に大學に於ては非常な排斥を受けてゐる、餘程有力な學者であつてもユダヤ人であれば一生教授になれないで居る人もある。さう云ふ種類の人種の區別のことをもう一つ申せば、日本は種々の點でドイツの眞似を致したが、幸に其の眞似はしなかつたと云ふ點であります。それともう一つは小學校の初めからして高等の教育に進む者と進まない者とを別ける、初等學校と稱する方は小學校丈で仕舞ふ者が入る學校で

あります。もう一ッは中學校で、それには進んで高等の學校に行く子供が入る、初めからして貧民階級の子供と富有階級の子供と別けて、高等學校に進む者と進まない者とを別けるのであります。日本ではドイッは豪い事許りのやうに思つて思るが、さう云ふ種類の社會的特權階級の區別は實に激しい國であります。それがドイッ社會民主黨の不平とする所で大に不平が起つて居る、彼等の團體を兵力に依て制裁する所以であります。日本には幸に其の方の區別はありませぬが、ひよつとすると眞似をしたがる人が出て來る。小學校に對しての區別はありませぬが、それより進んだ學校に、其の區別をしやうとして其の調査すら出來て居ります。

そこで、現在の狀態でありますが、兎に角今申したドイッ式の思

想を申しますると、人間各自の能力に應じないで其の人が生れた、某階級に生れたとか富の有る無しと云ふことか、それ等に依て其人が生活する社會に於ける地位を左右される、即ち人々各々十分に發達し成長すべき機會を奪はれて居る。それを平等にしやうと云ふ思想であります。總括して申しますれば政治上には普通選擧、經濟上には分配の公平、社會的には階級的の特權に對して反對する、是等が即ち社會正義の要求であります。然らば其社會的正義を如何にして實行するかと云ふ問題になりますると、實は非常な困難が重なり〳〵來りつゝあります。大體として先程申述べたやうに人間は社會に於て、有ゆる機會は均等に要求すべきである、又た經濟上の分配も公平に平等にすべきものである。概括

して申せば社會的正義は如何にも尤もなことで、實行しなければならぬことでありますが、それを如何にして實行するかと云ふ問題になりますと、非常な困難が出て來ます。其の困難を排除する爲に種々の學說があり又實行運動が生じて居りますが、要するに實行の問題は困難と思ひます。人間を全體として平等と見るか否やと云ふ問題が此問題の骨子になつて居ると思ひます。先程から申した社會的正義の要求は大體に於て人間は先づ平等なものと云ふ假定の上に立つて居ります。然るに實際を見ますると人間は必しも平等でない、生れた許りの赤子は皆同じであると言へばそれぎりのやうでありますが、實際は既に赤子の時にも體格が違つて居る。智力も子供の時から違つて居る、其の點に於ては

人間は總て天賦の權利が平等であると云ふ事は、事實是は許されない、其所に實際不平等があると云ふことは一方で認めなければなりませぬ。然らば斯の如き不平等なる人間が集つて造り上げた社會でありますから不平等を許して、僅かの階級に、特權を與へると云ふことを許して置くかどうかと云ふ問題になると、如何に人間は總て平等でないとしても、今日の社會組織に於けるが如き、種々の復雜した不公平なる制度習慣の爲に、今日の不公平を來すことは不義である。此不義をどうかして除なければならぬと云ふことは、公平の立場に立つ者は許すことであらうと思ひます。全體の人間を平等と見ることは到底出來ない、併しながら生れて天性平等でないから、そこで社會的不平等を多少許としても、今日

の如き不平等を造り上げて居ることが、社會的正義でありや否やと云ふ事に矢張結着するのであります。そこでそれ等に對する種々の法案運動の中で、徹頭徹尾平等主義を主張する者もあるのでありますが、併し大體マルクスの唯物主義に基いて居る社會主義から出た運動は總て平等を主張する方面であります。ロシアのトルツキーも此主義に立つて居ります。さう云ふ意味の平等主義の基礎に立つて居る社會的正義の要求は、要するに現代の特權を有する者に對して特權を有つて居ない富を持つて居ない一般人民を、社會の主權者にしやうと云ふ運動に外ならぬのであります。それ故に彼等社會主義者の主張する所は要するに勞働者と云ふ階級が一團となつて國の境を超へて前にも申した世界全

體を聯絡した國の境を超えた、世界全體の資本主と云ふ階級を倒し勞働者の社會を造り上げて、其の時に勿論資本主に對して勞働者一般の自由な人民が共同して資本を共有する制度の社會を造り上げやうと云ふ主張であるのであります。それに對して多少不平等は許して而かも尙社會的正義の要求を貫かうとする運動若くは學說主義も出て居ります然らば其の不平等の事實を許して而かも其の不平等なる人間の能力に對して正義の分配と云ふことを如何にすべきかと云ふ問題になりますと、是又頗る困難な問題でありますが、例へば斯う云ふ風に學說を立てることは出來る。卽ち人各自の能力に相當した報酬を與へる、社會全體を一つの大きな組織にして各自の能力に應じた報酬を與へると云ふ一

つの案であります。此場合に各自の能力を如何にして計るか是れ頗る困難な問題であります。或は其の能力を計る一つの標準と云ふものは何人でも最も社會全體に適した仕事に比例して報酬を與へやうと云ふ考もあるのであります。それ等の事に就て今一々此所で申述べる必要はないと思ひますが要するに社會的正義の要求は或はマルクスの全體平等主義の上に立つにしても若くは不平等の事實を許して、其の上に各自の能力に相當した分配を定めるやうに致しましても、何れにしても現在起つた社會的の正義の要求は、今までの社會に於ける不平的不平等又不當なる分配に對する一つの主張要求として起つたものであります。先程申した政治上の普通選擧の要求として現れて居ります。此の

普通選擧の要求と云ふことは要するにもつと遡つてフランス革命以前に貴族の階級が獨り權力を占めて特權を持つて居つたから其の貴族に特權を與へまいと云ふ運動が政治上の普通選擧の運動となつて、それが現在多數の文明國に於て行はれるやうになつたのであります。經濟上に於ける分配も同樣であります、大規模の工業の起つた結果は資本主と勞働者と云ふ二つの階級が截然と分れて、其の間に分配の不平均が生じて其不平均を打破しやうと云ふ方から生じた運動であつて、又社會的に見ましても同樣であります。各社會に種々の特權があつたり社會の種々の偏見があり各自の能力を伸すことが出來ず困る者がある、其の社會の因習其の組織の不公平それ等に對する打破の運動であります。

要するに現在に於ける社會正義の要求は今までの社會に不平均がある、不平等がある、不公平がある、それ等に對する打破の運動それを目的として生じて來たものであります。それ故に社會的正義の要求を觀察して見ますれば正當の要求であります。併ながら其の要求が實際の運動として起つて參りまする場合には、常に煽動的反抗態度を現はして居ります。今後と雖も尙此形勢は緩和されないことと考へます。要するに今迄の社會は利害を異にした資本主勞働者公卿華族、若くは士族それ等の種々の分子が集つて、さうして極めて人工的の社會階級種別が生じて來た、是が日本の狀態で、西洋でも同樣であります。西洋に於ては十六世紀十七世紀の封建制度が破れたやうであるが、併し其の遺り物があつ

てまだずつと今日まで遺つて居て、先程申したやうに、ドイツなどでは貴族が勢力を占めて居ります。日本の現在の如きも總て中央統一の下に封建制度を打破したやうでありますが、矢張封建割據の勢力が、或は地方的或は階級的に今日尙遺つて居ります。さうしてそれが新なる文明と結付いて今日のやうな狀態を造り上げたのである。所謂さう云ふ種類の特別なる事情の下に生じた、卽ち概括して申せば矢張封建割據の氣風と申して宜からうと思ひます。其の封建割據の氣風が形こそ變へて居るが、今日尙遺つて居て、社會に斯の如き種々の不公平なる分配の制度階級の別を造り、又階級の區別に從つて各々思想信仰性情性癖の違ひを生じて、又其の間には感情の離反と云ふ事も生じて來て居ります。例へば現在の日本で申しますれば、日本の陸軍は幸にしてドイツの如く沿革的軍制の下に特別の階級を造つて居りませぬが、併し段々現在の傾向を見ますると、所謂國民的軍隊として兵士全體は國民的に全體に亘つて居るが、軍隊の士官階級になるとどの地方から來たか、別種の階級から出て來た人か多い。先づ初めからして幼年學校士官學校で育て上げて來た者であつて、一つの陸軍氣質と云ふものが生じつゝある、さうして一生それで通す、人に依て種々ありますが、陸軍と云ふ一つの特別なる範圍に立籠つてさうしてそれ等の範圍丈で交はる、そこで陸軍士官の中には士官と云ふ特別なる氣質がある。海軍に於ても同樣でありますさうして其の海軍なり陸軍なりの特別なる氣質或は制度がある。其の制度

を標準にして他の社會の事業にも干渉しやう、他の社會の事業を指導すると云ふ傾向が、今日の日本の陸軍には生じつゝある、吾々は之を稱して軍閥と申す。或は是は當らないかも知れませぬが少くとも封建時代の遺りの氣風がある。其の氣風を以て他の方面に斬り入らうとする傾向が、確に現はれて居ります。殊に其の影響を被つて居る者は吾々の所謂教育家である。其の事に就ては種々のことがあるが今一々申上げる必要はなからうと思ひますが、例へば近頃の青年團の指導の如きも矢張其問題の一つであります。それが是非さうでなければならぬ必要があるや否やを知ずして、陸軍と云ふ特別なる階級の特別なる思想、特別なる性癖性情を異にして居るもの、それを以て他の社會に及ぼさうとする

氣風であります。即ち其所に一種の閥と申しますると語弊があるか知れませぬが、之を英語で申しますとクリックが生じつゝあります。それと同樣に所謂資本主と云ふ階級が又同樣であります。現在の成金と云ふものに就ても色々特別の氣風が生じつゝある、併し所謂其の成金氣風と云ふことは、此頃生じた事柄丈ではなからうと思ひます。謂所社會の變遷に對する富の分配等の色々變つた事がある、其の富の分配に伴て社會的の尊敬を得る方法が色々變つて來る。早い話が此頃社會の人の大に目を惹きました問題は昔の餘程古い家の貴族が祖先以來代々傳へて來た美術骨董品を賣却する、さうすると爭つて買ふ人は所謂成金である、茲に一つの大きな社會上の變遷が現はれて居るのである、今まで貴族

と云ふ階級は祖先傳來のさう云ふ美術骨董品があると云ふ事は、貴族の今までの特色として貴族階級と云ふものが成立つて居つた、現在も勿論さうでありますが、それが現に段々崩れて來て彼等は爭つて祖先傳來の美術品を金に換へる、其の金に換へた金は何にしますか、私は斷言致しませぬが、貴族の品格として彼の家に雪舟の繪卷物がある、誰々の彫刻物があると云ふこと、さう云ふ事が家の品格を加へる所以で、貴族自からもそれを尊重して居るのであつたが、近來は金が欲しいからそれを賣飛ばして金に換へる爲に競賣に附する、さう云ふ違つた氣風が貴族社會に出て來て居る、さうして今度はそれを欲がつて買ふ者は誰かと云ふと多くは成金で、其の成金が美術を愛すると云ふよりも其の美術品が何々侯爵何々伯爵の家から出たもので、何萬圓何十萬圓と云ふ事でそれを買ふ、此の成金と今までの貴族との間に既に氣風の融通が出來て居る。是等の事は社會の變遷の場合には何時でも生ずることで敢て嘆くにも及ばぬ、自然の成行きに任せて敢て驚くことはないのであります。

元龜天正年間信長、秀吉、家康の時分は、今まで數代傳つて來た貴族階級は破れて新なる貴族が生じた、今日の貴族の出來たのは多くは――お差支があつたら御免を蒙りますが、あつても致方はない、今日の大名華族の大多數と云ふものは槍先一本の功名で華族になつた者で、一つやり損ずれば斬取り强盗武士の習ひと云ふ事もありました、彼の時代には系圖買と云ふ事も行はれたのである、古

い、貴族の系圖を新なる華族の槍先一本でなつた大名が買ふ、さう云ふ大名が多くなつて段々需用が多くなるに從つて、堺邊では其の系圖を拵へて賣つた者がある、古くて最も良い系圖が出來て居れば高く買つた、此の系圖買、系圖賣と云ふものが元龜、天正の年間にはありました。

今日の成金なる者は系圖はどうでも構はぬが、其の代り今申したやうな、茶器とか骨董とか云ふ物に金を使つてそれに幾萬圓の金を費したと云ふことを以て誇りとして居る。然らば今までの貴族は其の方に關係しないで居るかと云ふとさうでない、既にもう自分の家財として先祖から傳來して來た者を賣出して、それを金に換へて仕舞ふ、そこが今までの貴族と此頃の貴族との違ふ所

である。さうして此頃は又貴族階級と所謂成金富豪階級との結婚が行はれる、それは結婚なさることは勿論勝手でありますが、少し皮肉に感せられるのであります、此事が既に今の現在の社會が非常に變遷しつゝある明白なる現象であります。

それに致しても今申した日本現在の貴族階級と云ふものゝ內容が段々變りつゝある、一方には成金が起り一方には今まで氣風の異なつた貴族であるが、是が兩方遂に同じやうになるに違ない、今でこそ一方は昔からの華族一方は成金と云ふやうに分つて居りますが、是が五十年百年と經つと兩方共に同じものになる。元龜天正の際に於ける槍先一本の大名等が今日ではそれより以前の藤原家の華族と同等と看做されて居る、是と同樣な時も出て來

やうと思ひます、此儘に進んだならば、斯の如き社會は吾々大多數の人民には關係ない所であつて、今までの貴族とさうして新に出來つゝある富の上の貴族、此兩方が結婚に依て一つの階級が又た起りつゝある、此階級が將來如何なる形を取り如何なる運命を持つかと云ふことは、日本の社會問題に取つて重要な問題であります。兎に角斯の如き階級が生じつゝあるそれが又社會に一種特別の位置を占めつゝある。地方に依ては、此の新に生じつゝある富の貴族に對して羨望してそれを眞似やうとするやうな氣風も出て居ります、何れにしても斯う云ふ新なる階級が生じつゝある。今までの貴族にあつても其の氣風が生じつゝあることは見逃すべからざる事實であります、卽ち今までの氣風とは違つたものが

今後と雖も生じて、又新なる階級新なる特權を持つて居る階級が生ずると云ふ事はありませうが、又之を棄てゝ置いたならば第二第三の反抗的運動が生じて來ます、今申した陸軍と云ふものが一つのクリックを造つて居るが、是が今日の勢で進んだならば、名に於ては國民的陸軍と稱しつゝあつても、其の實一部分の人が權柄を握つて居る陸軍になる虞れがある是は海軍に於ても同樣であります。

今まで無かつた社會の產業に依て新に富を得た華族だとか、或は社會上特別の權利を持つて居る貴族と云ふ特別の位地を占めて居る者と、大多數の一般人民はさう云ふ方面に對しては到底對抗することが出來ない、富の上に於ても其の他の特權の上に於て

もさう云ふ形勢が現はれて來れば、遂には第二第三の反抗運動として、社會的正義を要求する聲は何時までも煽動的の形をもち、對抗の形を以て現はれて來ます。それで是等の社會問題は重要な問題であるが、今までの成行きと現在の形勢を以て此儘に棄てゝ置いたならば、社會は反抗と反抗が常に戰つて、不幸なる結果を來すであらうと思ひます、それ等が一方に於て、社會的正義と云ふ旗印を持つて現れて來ることは、吾々の注目すべきことであらうと思ひます、斯樣に一方に於ては利害慣習を異にして居る點から衝突を生じて、而かも社會的正義を要求する運動としてさう云ふ事が現はれて來るが、茲に一つ注意すべき點があります、正義の觀念と權利とは始終相伴つて來る、正義と云ふことと權利と云ふことは詰り現在の社會的問題の旗印として居るので、現在の社會問題は正義權利の要求であります。

そこで之に對する宗教の立場と云ふ問題を考へて見ると、丁度それと或意味に於いは相反したのが宗教の主義である、併ながら或る意味に於ては又相補ふべきものである、其の相反したやうに見えて尙相補ふへきものは卽ち愛であります、義に對する愛であります、此の差別並に關係は昔から色々宗教に於て常に注目して來た所であります、今申した社會的要求のことは義の問題であります、それに對して宗教の中心主義となるものは儒教の言葉を用ひて言へば義と仁であります、之を基督教の方で言へば愛情の問題であります、佛教では之を名けて慈悲の二つとして分け、それを

統一するのであります、所謂義は儒教の方から言つても眞理に從つて正しい秩序を整へることが義である、それに對する所謂仁若くは愛若くは慈悲と云ふ人情の自然に基いて居る愛情を本にして、人間の人情の合一を目的とする人情の結合を目的とする主義であります。それで之を抽象的に申上げるよりも一二の實例を以て申上げやうと思ひます、義の關係即ち義の方は秩序仁の方は結合です、此二つの關係は或は斯う云ふ言葉も使ひます、義の方は權威、仁の方は言ふ迄もなく慈愛、それで慈愛と權威との對照並に關係は今私は申述べる時間はありませぬが、尙此點に就て私の考へて見やうと思ふことは私の「教育と宗教」の中に殊に慈愛と權威との關係を一章設けて私の考を申述べてありますから、其方を御

參照を願ひます、此所ではそれを抽象的に申上げるより一、二の例を以て申上げます。

新約書の中に基督が神の國を種々の方面から說明して居ります、神の國は猶葡萄蔓の如し、汝等は葡萄の實である、吾は葡萄の蔓で一つの蔓に葡萄の實は澤山出來るが一つの蔓で生命を通する、天國も亦斯の如く神の內に於て生命を一つにして居る、と云ふやうな譬へがあります。

又義と愛との關係に對して所謂勞働者の譬で、或る主人が勞働者を雇つて其の內の勞働者の或者は一日働いて他の勞働者は半日丈働き、さう云ふ風にして共に働いて一日の仕事を終つて後に主人は總ての勞働者に同じ報酬を與へたと云ふことであります、

是は先程申した平等主義の考へであります、人に遣る報酬は其の勞働の分量に比例することを必しも要しない、眞心を盡して働いた者は一日働いた者も半日働いた者も同じである、神の見る所は斯の如きものであると云ふことを言現はしたものであります。

それ故に所謂社會主義者の中に於ては此事を說明して、自分の社會主義が基督敎に基礎のあることを明かにする爲に、此話を能く例に引くのであります、即ち義の問題として、天國に於ける問題は義の問題に非ずして、愛の問題であると云ふことを此話で言ひ現して、居るのであります。

もう一つの譬は百匹の羊が居つて其の中の一匹が逃出した、其の時に當り前に居る九十九匹の羊を棄てゝ置いて逃出した一匹

を捕へた、此の場合に單に義として申しますれば逃出した一匹は罪を侵した道に外れたもので、之を人間社會の義の上から言ふならば罰すべきもの若くは棄てゝ置くべきものである、然るに基督敎の敎へでは他の九十九のものは其の儘棄てゝ置いて逃出した一匹を救ふと云ふことが基督敎の精神である、即ち單に義の精神でなく愛の精神であると云ふことを此の語に依て言ひ現して居るのであります。もう一つ此所に佛敎のお話を申上げても同じ點を說明する材料に供することが出來ます。

明治年間の佛敎僧侶の中で學德共に備つた福田行誡師と云ふ淨土宗の高僧があります、此の人增上寺に住んで居つて其處らへ出掛ける度に增上寺の境內に居る乞食に合掌禮拜して過ぎられ

た、さうすると其の弟子が行誠師に、何故あなたは乞食を拜むかと云ふと、行誠曰く、彼の乞食はどうせ斯んな處に居る位だから貧に苦んで居るのである、併し世の中には隨分貧に苦んだ結果泥捧をしたり放火をしたりする者がある、然るにあの乞食はさう云ふ事もしないで乞食をして居るのは、即ち地獄の相を現はさずして、貧窮の中にも人の心を失はないで居る、其の人の心を持つて居ると云ふ點を尊敬して拜むのだと言はれた。即ち是れなども義の上から言へば間違つた考と言つて宜い、乞食は何と言つても乞食であるから、乞食として社會相當の待遇を與へれば宜いと云ふのが義の要求であります、之を禮拜すると云ふことは義の上からは爲すべからざる事である、併ながら一方の人情の自然を佛敎の上に

當嵌めて行けば、彼も人なり我も人なり、彼の昔の俳句に「初雪やあれも人の子樽拾ひ」と言つたやうに乞食でも、之を拜む心になるのは自然の勢であります。其の點に就ても佛敎の上から種々説明は出來ますが今一々此所で申上げる要はないが、尙もう一つ其點をお話申して見やうと思ひます。

それは明治以前の事で、日蓮宗の優陀那日輝と云學德兼備の有名なる人が、加賀に塾を開いて居つた、さうして其の塾に一人の小僧が居つたが、どうも泥捧癖があるので、塾頭が其の小僧を度々警しめるが中々惡い癖が已まない、矢張盗みをする、そこで塾頭が優陀那師の所へ行つて、どうも彼の小僧は手癖が惡くて仕方がありませぬ、どうか放逐して戴きたい、そうすると日輝和尙は曰く、イヤ

放り出してはならぬさうして彼奴が盗みさうな物に「盗むべからず」と書いて貼つて置けと言はれて、塾頭は考へるのにどうもあれ丈警めてもそれに應じないで盗むのである、それ故「盗むべからず」と書いて貼つても仕方がない、師匠は變なことを言ふと思つて其の通りにやつて見た、さうすると果して其の小僧そんな事は一向きかない、矢張「盗むべからず」と書いて貼つてある物を盗んで行くことは少しも直らない、そこで塾頭は最後の所謂勘忍袋を切らして、又師匠の所へ行つて、どうも今度はどうしてもあの小僧を放逐して下さい、さうでないと塾頭としての私の職務が勤らない、私の塾の監督をして行く事が出來ない、と言つて放逐を要求した。さうすると日輝和尚は、彼は放り出してはならぬ、何所までも彼奴

は此所に置くと云つた、そこで塾頭も少しむつとした、それは師匠どうも仕方がない、どうしてもあの小僧を置かれると云ふ事ならば、私は塾頭としての職を執ることが出來ないからお暇を頂戴したいと云つた、さう言へば日輝和尚がそれならばお前達の方が止つてあの小僧を出さうと言ふかと思ふと、日輝和尚はあゝさうかお前が出て行くのか、それならば出て行くが宜い、あの小僧は決して出してはならぬ、と言はれて塾頭も大にまごついた、實は出て行く氣はないがさう言つて見た、所が存外自分に出て行け小僧は出さないと言はれて何の事か譯が分らぬ、そこで又言ふには一體私は長く御世話になつて居て、今更出て行く積りもありませぬが、お師匠樣は何故そんなにあの小僧を最負なさるのですか、彼奴は泥

捧で、仕様のない奴ですが、どうしてさうなさるのですかと、多少師匠に詰問的に言つた、日輝和尚はお前には此理屈が分らぬか、日常お前が修業して居る佛道の極意は他にはない、考へて見よ、お前が出て行くのは惜くない事はないが、お前は是丈の人間になつて居るから、此の先き何所へ行つても眞人間としてやつて行けるから出て行け、併しあの小僧は今迄お前がやかましく言つても泥捧癖は直らない、さう云ふ者を此の塾から放り出して仕舞つたならば、此の先きどんな惡い人間になるか分らない、此の塾に居てすら直らない者だ、それを放逐したら益々惡い者となるから、彼奴は何所までも此所に置いて、俺が眞人間にしてやる、是が佛道修業の一つの大切なる綱目である、と言はれて塾頭も感心した、所が其の手癖

の惡い小僧が隣りの部屋で其の話を聽いて居たが、直ちに其の所へ飛出して師匠に泣いて懺悔して、今まで自分は師匠がそれ丈自分の事を考へて戴いて居ると云ふ事も知らず、うか〳〵として泥捧をしたが、此の佛道の修業をして、人は各々佛性があると云ふ其の點も伺はないではなかつたのですが、つい泥捧をして居つたが、今後は魂を入替へますと言つた、それ以來眞人間になつたと云ふ事でありました。

即ち宗教の教へる所の愛の精神は斯の如きものであらうと思ひます。世間普通の義理からすれば泥捧した者は罰せられる、罰するのが當り前で、乞食は乞食の待遇を與へるのが相當であると云ふ事になります。それのもう一つ裏に廻つて、乞食でも或は泥

捧でも、矢張共に人間である、人間である以上は其の人間の天性を順當に發達させるならば、眞人間になり得ると云ふ希望を失はせない、茲に宗教の愛の精神が存在して居るのであります。それを基督教の言葉で言へば縱令泥捧であつても、或は乞食であつても共に同じく神の子である、吾々の兄弟同胞として之を育上げると云ふ精神が基督教の愛の精神である、佛教の言葉で申せば違ひますが、吾々も共に人間として一切衆生共に佛性を具して居る、今其所らに居る乞食でも、色々の愚痴もあれば煩惱もあり、迷もあるが、其の中に佛性もある、それを取立てゝ佛になるやうに、他から仕向けてやらなければならぬ、それは各自自分の事でもさうである、各々自分の現在の有樣を檢査して見れば、迷もあれば煩惱もあれば

又恥づべきこともある、併し一方からは良心も出て來れば義理の判斷もある慈悲の心もある、此方面の自分の心を發揮させて行けば、佛の光を出すので各自各々佛である。此の吾々各自自から具へて居る佛性を發揮すると共に、多數の一切衆生にも佛性を發揮するやうに仕向けて行く、是が即ち佛教の慈悲の精神であります。佛教の立場は要するに斯の如き慈悲の精神に基いて行く、愛の精神を根本にしてそれを發揮するのが、宗教の根本の精神であります、此の點から見ますれば、宗教は現在の社會問題に對して、總て社會問題の反面にある人生に對する價値判斷を一轉換することを要求するのであります。即ち現在社會問題が種々の方面に起つて居る、それが遂に國際問題の戰爭となつて、現今見るが如き大戰

となつて居る、是は一方の義の上から言へば自然であるかも知れない、人各々其の主張する所を主張し、權限を主張して、正しいと思ふことを言つて、それが衝突すると互に叩き合をする。併ながら現在の社會問題に於て或は國際問題に於て總ての問題が、其の基礎を利益の上に置いて、さうして其の利益を主張する上に於ける、義の秩序を整へる上に、根本の人生の缺陷が存在して居るのではないか。現在の社會問題は所謂義なるものを、旗印とする義を要求する。義の要求の原因を調へて見れば其の本は何所にあるかと云ふと利益問題である、特權を專有して居る貴族階級も、自分の利益の爲に自分自からの特權を向上し伸張しやうとする、之に反抗して起つた所の勞働者或は一般人民は、其の今迄の貴族の利益

の專斷に對する反抗として之を主張する、さうして其の結果として如何に富と財產と特權と其の他の機會に於て得べき利益を正當に分配すべきか、と云ふ問題になつて、今日になつて居りますが、其の利益を以て相爭ふと云ふことは、到底其の基礎の變らない間は熄まない、然らば現在の社會問題を如何なる方向に向け如何なる解決を附くべきかと云ふことは、一方の根本的の利益本位の主義を、一つ轉換して玆に義に對して愛の精神を吹込んで最後の解決をしなければならぬ、其所に宗教の天職は存在して居ります。前申した今までの宗教は、過去百年二百年前の個人本位のものとなつて居た、是は佛教も基督教もさうであつた。併ながら現在は佛教でも基督教でも各自多少覺醒して來た、元來の精神とする所

を發揮して行く、一方に於ては、宗教の精神を單に個人に限らないで、社會的事業の上に社會救濟の上に發揮しやうとして居る、さうして其の根本の精神即ち社會的の秩序を整へると云ふことも必要であります。單に義の問題として處置しないで、義と愛とを合一した仁義即ち慈悲と理智、義と慈愛とを一つにしたものを投じやうと云ふ事に多少趣きつゝあります。然らば其の點に於て如何なる方面に其の主義を實行しつゝあるか、又今後如何にすべきか是は次に多少述べたいと思ひます。

そこでもう一つ是等の宗教の根本精神から見た愛情と言ひ若くは慈悲、恩愛と云ふ者に對する今までの觀念に就て少し申上げる必要があらうと思ひます。

此の點に於て佛教は基督教と多少趣きを異にして居ります。佛教の元來の主義から言へば、平等を主義として居る、佛と衆生とが同等である、此點から言ひますれば、佛教の平等主義は、極端と申す程の所まで行つて居ります。例へば極端に言へば、禪宗の如きは吾も佛であるからそれを自分で殊に崇め奉る必要はない、吾も佛なりと云ふ所の平等の精神慈悲を主義として居つたのであります。併ながら佛教が支那、日本を經て今日に至る間には種々の變遷を經て居る關係上、矢張此の愛の精神即ち佛教で言ふ悲の精神――或は慈悲と申しても宜しい此の慈悲の精神は、當時上下の恩義の關係となつて今日まで存在して居ります、是は封建的氣風の餘波と申して宜からうと思ひます。所謂恩愛と云ふことは、一方

恩愛を與へる人から言へば慈悲なさけである、之を受ける方から言へば有難いことゝして受ける、即ち一のなさけとして之を受けると云ふ所の、上下の關係から來て居ります。それですから今申したのは平等に過ぎるやうであります。具體的に申すと佛敎で四恩の敎へと云ふのがある、國王の恩、衆生の恩、三寶の恩、父母の恩、是等の四恩が人生の道德の本である。此場合に衆生の恩丈は多少平等主義の基礎になつて居ります。此の外には國民として受ける國王の恩、父母の恩にしても愛すると云ふ側からし、愛情として無條件に之を與へる、受ける方では恩惠にしてなさけとして受ける、佛敎では其の關係を混同して恩愛關係として行くのであります。此の問題は封建時代などには、最も適して居るのであります。報德敎の如きは、矢張恩愛を本として此の理想の上に立つて居ります。所が此問題から言ひまするとと所謂先程申した愛と云ふ方面は明かになつて參りました、それと共に義の關係は十分に現れて來ない、恩愛主義一遍の道德に偏して居るのである。兎に角佛敎の元來の主義が現在の佛敎を觀察するに、恩愛關係として義の關係を無視する方面に向つて居ります。それですから、例へば眞宗などでも、信仰の極致は何所にあるかと言へば、義の關係よりも、愛の關係として居るのが、親鸞上人の築き上げた淨土宗の信仰である。それ等のことは一々こゝでは申上げませぬが、元來基督敎は神と人間との關係を君臣の關係、父母の關係と見て居ります、從つて其間の關係は、恩愛の關係で、義と云ふ方面の關係は殆ど

ないのであります。即ち神は其獨り子である基督を、吾々に賜つて、其の基督が血を流すことに依て吾々を救ふことが出來る、義の關係にあらずして單に親の愛情である。佛教に於ては恩義關係一方を見るのであります。斯の如く對照して見ますれば、現在に於ける社會問題の中心點は社會的正義の要求で、其の基礎は何にあるかと言へば、其の旗印は義の社會的要求である。宗教の教へは佛教も基督教も其の他の宗教も大體異つたことはない、宗教の方面からは恩愛主義の關係を以て、人生を率ゐやうとするから、茲に一つの大きな距離が出來て、此所に難問が生じて居る。そこで私の考へでは是等の宗教の、殊に佛教の方に於ては、義の觀念が餘程強かつたのであります。然るに現在の佛教は、其の點を粗略に

すると云ふやうな事があるが、それは姑く別問題にして、斯の如く見れば一方今日の社會問題が困難に遭遇して居る、其の根本は人民本位の主義主張が困難を呈して居ります、其の點に於て一つ社會問題に完全なる解決を與へる爲には、人間が各自に人生の根本問題に對して、一つの價値の轉換をやつて見なければならぬ、人生の價値ある所以は、何所であるかと云ふ點を理解させなければならぬ、此問題は一つ違ふ方の人生の考へ方の方面から進まなければならぬ。斯の如き新なる違つた基礎に依て現在の社會問題、社會的正義の解決方法も發見することが出來やうと思ひます。要するに社會問題の側から正義と云ふことを、今社會運動として主張して居る、宗教の方は、それと殆ど正反對に、義の關係よりも、愛情

主義の恩愛と云ふ方面を重んじて來た、斯の如くにして兩方相背いて居ることは、社會問題の爲に不幸である、宗教の爲にも不幸である、人生全體人間全體の運命に係つて居ります、之に對する解決の方向を指示し、社會本來の社會的正義の問題を深く進めて、其の主義と恩愛との間から出て來た義の主張ばかりでなく、愛から生じて來た義の主張になる必要があらうと思ひます、宗教が愛情ばかりでなく義を加へて率ゐるやうにするのが有效なる教へと思ひます、要するに儒教の言葉で言へば仁と義との合一であります、佛教の方で言ふと、慈と悲との合一である、社會問題は義の方面を代表し、宗教の教へは愛の方面を代表する、此の二つが如何にして合一することが出來るか、人生の全體を圓滿にし幸福にするが爲に、此の二つを合一するといふことが出來るか、此所に問題があることゝ思ひます、それに對する方法等は次講に申上げやうと思ひます。

今申したのは、餘り概括的でありますが、茲に一つ一寸今申した事柄の説明として、一例を申上げて置かうと思ひます、即ちそれは、例へば慈善事業の精神如何と云ふことの如きも、此の問題の中に十分含れて居る、今までの多くの人の慈善事業は、憐みの精神を本にして憐むべき者に物をやる、例へば此頃でも淺草の觀音あたりに乞食が居る、其所へ詣るお婆さんが乞食を可哀さうだと言つて金をやる、それは慈善の心に違ない、或はもう少し遡つて奈良朝時代にも、種々の慈善事業が起つた。聖武帝の皇后が病院を拵へた

り、病人の世話をされたりした、今日でも同じやうな事があります
が、それの如きも慈善の心である。併し慈善の心は斯の如く恩愛
慈悲と云ふ方面丈で、可哀さうだ憐れだと云ふ心丈で、惻隱の心丈
で行ふて居る、其の慈善と云ふものも、其の心に於ては勿論なきに
勝ることでありませうが、慈善の根本の目的をそれ丈で達し得る
や否やは頗る疑問であります、否な達し得ないと云ふことは明白
であります、淺草あたりに居るやうな乞食を救ふのに、金をやるの
は唯乞食を多くすると云ふ結果になると云ふ事は、現在の狀態に
見て申上げて宜からうと思ひます。各地方に隨分色々の慈善病
院が出來て居りますが、其の慈善病院に所謂貧民の病人を連れて
來て癒す、所が現在のそれ等の事業の狀態を見ると病院へ連れて

來て癒すと元の貧民窟に送る、貧民窟は衛生狀態其の他の原因で
貧民窟特有の或種類の皮膚病、或種類の熱病、殊に多いのは結核病
等があります、さう云ふ貧民窟特有の病氣の者を伴れて來て癒る
と又貧民窟へやる、又直ぐ病氣に罹る伴れて來る、さう云ふ風で始
終病院へ往復して居る、病院のする仕事は恰も飯の上の蠅を追ふ
如き仕事になつて居ります、それ丈ならばまだしもでありませう
が、其の結果種々の弊害が貧民窟それ自身の上にある、初め其の病
氣を癒してやることは善い事のやうでありますが其の事以外の
害が伴つて居ります、例へば貧民が誰でも病院へ入れるから度々
入る、申す迄もなく貧民窟よりも病院に入つて居る方が總てが良
い、冬は温い食物でもお粥でも與へられ、牛乳も貰へる、貧民窟に居

つては牛乳一杯飲むことは出來ない、それが廣い結構な家の中で白いシートの上に寢せて貰へる、貧民窟に居るよりは宜いから又行かうと云ふ考で惰けるやうな者が中にはある、是は日本丈ではない外國でも病院にはさう云ふ事がある、是は自然の勢である、慈善病院に入つて癒つたかと思ふと、自分の貧民窟へ行く、病院に行くことを度々馴れて仕舞つて何とも思はないやうになる、それは極端でありませうがさう云ふ事で恩に馴れると云ふ事がある、單にそれが恩に馴れると云ふ丈でないもう一つ進んで恐しい考も出來る。東京の或慈善病院の醫員の話ですが、斯う云ふ病院へ度々入つて來る者が醫者にはまだ言はないが看護婦などには時々斯う云ふことを言ふ、君等が此所で働いて居る、けれども此の看護

婦や醫者は、此の病院があるから食つて行かれるのだ、又此の病院のあるのは我等貧民樣があるから出來たのだ、此所で醫者だの看護婦だのと言つて威張つて行かれるのは我等貧民樣の爲めだ、さうすれば此の病院に居る君等は我等貧民樣がお客樣だ、主人だ、と言つて威張り出すさうです。此の精神は丁度同樣のことがアメリカの勞働者の中にもさう云ふ恐しい考へが出來て居るので、それ等の精神と似て居る。是は一寸序でありますから申しますが、矢張眞宗にそれと同じ惡人正機と云ふ教義があります、親鸞上人は曰く、極樂のお客樣は惡人である、如來樣は善人の爲めにあるのではない、惡人を迎へる爲にあるのである、それであるから善人と云ふ奴はお招伴で我等は大手を振つて極樂のお客樣になるのだ。

と云ふ事があるそれと同じく貧民も病院のお客樣と言へるかも知れないけれども、要するにさう云ふ種類の慈善事業は、或點に於ては社會を利益するが、それに伴ふ弊害が出て來るから、其の根本を突き止めて、貧民の病氣を救つてやると云ふことも必要でありますが、如何にして此の貧民の現狀に處するか、それは各個人に對することでなく、社會全體として救濟しなければならぬ、貧民の現狀に處する方法も色々な點があります。今日の社會には社會全體に種々の不公平なる制度がありますから、其の結果其人々に不平のことや或は不公平のこともあるから、其の貧民各個に就ての種々の原因もありますから、之を救濟する事も必要であるが、貧民救濟の社會問題は、唯一人々々の、或は病氣を癒してやるとか其の

生活を整へると云ふよりも、社會全體として一地方全體の貧民の生じないやうな組織を造つてやることが必要である、それが社會的正義の大問題であります。今日の日本の慈善事業の多數は病院を立てゝ唯病氣になつた者を其所へ引張つて來て癒してやると云ふ、姑息の慈善事業に過ぎないのであります。茲に百萬圓掛けて貧民病院を造るならば其の半分は病院に使ひ、殘つた五十萬圓は貧民社會全體の家屋の改築でもやつた方が結果は割合に宜い。慈善病院を立てゝも貧民窟それ自身の衛生狀態を其の儘にして置いて、唯病人を伴れて行つて癒してやる、是では社會的のやり方ではない、社會全體に此の問題に熱中し、さうして貧民窟の衛生狀態を改善し、病人の出來ないやうにすると共に、一方に於ては

第一着手としては、貧民階級の生じないやうにするのが、社會問題の重要な點であらうと思ふ、私の考では現在の土地所有のことの如きは之に對する一つの大きな問題と思ひます、現在の慈善事業の如く唯憐れだと思つて恩愛を與へると云ふ偏したやり方でなく、之に對してもう一つ義の考を共にして、社會的正義を整へると云ふことが問題で、貧民を救ふならば其の貧民を救助する根本問題の社會的正義を如何にして實行するかと云ふ事が伴つて來なければならぬのであります、併し唯義の問題のみでない、同時に彼等に犧牲の精神を與へなければならぬ、此の慈善事業の一つに致しても仁と義との合一が必要であります。

其の問題に對する最後の話として申上げて置きます。ミス、ア

ダムスの言つて言葉に「吾々は貧民の爲に慈善事業をするには、貧民と共に慈善をしなければならぬ」といふことがあります、實に貧民の爲にする慈善事業は、――假りに私共は貧民でないとして、或る場合には高等貧民と云ふ名稱も附けられるが、假りに貧民でないとして、さうして私共が貴族社會或は成金先生を集めて金を出させて、慈善團體を拵へて慈善事業を行ふ場合には、現在のそこらの慈善事業も多く同樣でありますが、多くの人の心持に從つて金を出して、さうして貧民と云ふものは別になつて、所謂彼等の慈善事業を行つて貧民に恩義を被せてやる、そこで貧民は恩に馴れて彼等は恩を忘れて威張ると云ふやうな人も出て來る、斯う云ふ不徹底なことを彼等は貧民の爲にする慈善事業としてやつて居るの

であります、彼等と共に慈善事業をする、彼等と共に正義を行ふ、詰り貧民問題と云ふものは何も貧民丈のものでない、社會全體の問題です、然らば此の社會全體が共々社會の中の貧民と云ふ一つの特別な者が出來て、哀れな狀態に居る貧民彼等丈の問題でなくして、吾々社會の人間は總て共にすべき問題である。言葉を換へて申しますれば社會に貧民があつたり、若くは犯罪に關する場合の貧民でないもの、犯罪人でない者は吾關せず焉で高見の見物をして居つてはならぬ、私なら私一個は大して貧民でなくても、亦犯罪人でもないけれども、同じく此の社會に生活して居つて斯の如き憐むべき貧民が出來たり、病人が出來たりする場合は之を救助すべき責任は連帶責任として、其の責任を吾々は彼等と共にして

此の社會を救濟し、此の社會の秩序を整へ直して、さうして貧民と云ふ者を減少し、犯罪者などの少くなるやうにすることは、吾々の共同責任であると云ふ意味で彼等と共に慈善事業をする、其の點から申ますれば、義の上に於ても愛の上に於ても、仁義を合せた救濟事業が必要であると云ふ事になつて參ります。要するに斯の如き意味に於て宗教信仰と社會問題を、言はゞ同じ事柄を義の方面と愛の方面と兩方面から違つて向つて居た、さうして懸隔して居つたのであるが二つの方面を各々全體と見て、之を合一して進んで行くには、其の社會的結合に對する各々共同責任觀念として、仁と愛と慈悲とを實行する所以であります、然らば其の社會的結合共同責任觀念と云ふものゝ其の意義如何と云ふことは次に多

少申上げて見たいと思ひます。

第三講　人生の社會的結合に對する宗教の力

本能的結合、義務結合と理想結合――人生の社會的理想と其の人道的發展――人類の結合に對する理想並に信仰の力

所謂社會は種々の方面がありまするが、畢竟人生を如何にすれば、圓滿に充實することが、出來るか、と云ふ問題に歸着するのであります。人間を唯一個人として生活して居るものとしてでなく、所謂社會的生活として、人と人と相助け相補つて、社會的生活をする、斯の如き意味に於て人生を如何にすれば圓滿に充實すること

が出來るか、そこに社會問題の根本があります。現在の社會問題が現在の文明の事情と、特別の關係の下に種々の方面から發生したものに過ぎないのであります。そこで全體に亘つた社會問題を廣く言つて、人生問題の進路と指針を如何なる方面に取るべきかと云ふ問題になりますれば前に申上げた如く、人間の生活には一方には愛情、恩愛の關係があり、それと共に又義理、意思の關係がある、此の二つは現在の人生を組立つた縱筋と横筋である、然るに人間の生活に於て或る特別の事情の下に、此二つが往々にして衝突した場合があつた、現在に於ても場合に依ては衝突して居ります。例へば德川時代に於て義理と人情と言へば二つは衝突するものと限つて居つたのであります。義理と云ふものは義の秩序

の方面であります、人情の方は人間の自然の天性として愛する情である、此の義理と人情は衝突するものと定つて居つたと云ふのは、德川時代の社會道德に於ては、義理と云ふことを非常に窮窟な、又形式に囚はれた形に於て强制致しました爲に、人情の自然を殺すと云ふ事が起つて來たのであります。德川時代の戲曲を御覽になれば、義理と人情の衝突を抽いて居るものに外ならぬ、其の反對に現在の文明に於ては、場合に依ると人情の放埒が勢を占めて、其の爲に社會の秩序を非常に破るやうな場合も往々にしてあります。數年前は一時日本の思想界は、暴風の如く荒廻つた、自然主義の爲に方面を棄てゝ人情に附かうとした、斯の如く義理と人情と往々にして衝突する場合があるのでありますが、若し出來るな

らば人生の圓滿なる發達には、此二つの方面が兼ね備はることが出來まいか、玆に即ち社會問題人生問題の結着する所が存在し、さうして其所に宗教の人生に亘る力が存在するのであります。

そこで人間の各個人としての人間の天性を檢査することは姑く畧しまして、此の社會生活を遂げる上に於て人間の性情が如何なる方面を持つて居るかと云ふことを少し考へて見ますれば、今申した義理と人情の問題に光を與へることが出來やうと思ふのであります。人類の生活は其の一番に基礎となる土臺になる所を叩いて見ますれば、要するに本能生活にある、本能とは人が他から教はらないで又理論に依て成立たないでも、自然其の方に趨かざるを得ない傾向を持つて居る、それが本能であります。

人間の本能を分類すれば種々の方面に分けることが出來ませうが、恐らくは一番根本的の本能は食慾であります、俗語で言へば色氣と食氣と稱するものであります。食慾と云ふのは即ち人間の生存即ち此身體の生存を續ける爲めの本能である、それが第一には食物を要求し、それから進んで衣食住を段々豐富にして行かうと云ふ慾となつて起つて來ます、尙進んでは多くの富を得或は大事業をなさうと云ふ野心、或は大望を起すのも、要するに食慾を本として、其の生存の慾を擴張したものであるのであります。それと相列んで人生の重大なる力は色慾である、是は人間の種族を續ける爲にする自然の傾向であつて、所謂食慾が生存慾であるならば、此方は即ち生殖慾であります、色慾の話になると多くの人は

汚ないこととして、或は公の席で言ふべからざる事のやうに考へる人がありますが、さう云ふ考は要するに先程申した如く、偏窟な義理を以て人生を律しやうとするのであつて、色慾をそれ程恥づべきこととするならば、人間世界に色慾を實行しない人が何人あるかと云ふ事を問ふより外はないのであります、さうして又諸君と吾々とが生存し此の身體が斯うして出來て居る、其の本を尋ねて見れば誰か色慾實行の結果ならざるものがありませうか、所謂人間は天から降りもしなければ地からも涌いて出ない、人間の色慾を滿足の結果吾々子孫が出來て居る、唯之を其色慾としての み實行すると云ふことでなく、其の中にもう一層重大の意味の色慾を發揮することに依て、人間の子孫に種々の變化を呈して來るのであります。要するに食慾と色慾とは人間の本能の最も根本的なものである、是が本になつて吾々の子孫が出來、さうして社會的存在も是から出來て來るのであります、此の點から申しますれば人生の土臺は動物と餘り異なるものではないのであります。一々申す迄もなく動物も植物も共に食慾と色慾とのあることに依て生存を維持して居るのであります、此慾が本になつて、茲に人間は社會的結合の第一歩である家族並に種族を生ずるのであり まして、此點が人間が他の多くの動物に異なる點であります。勿論動物にも多少家族生活がありますが、其の家族生活を本にして之を擴張し充實することが動物には缺けて居る。人間は此二つの慾を本にして家族的結合をし、同時にそれを基礎にして進んで

大なる社會生活をすると云ふ事が出來る、茲に人間の一つの特色があり茲に土臺とも云ふべき點がありますが、此の動物と植物と人間とは共に生物として同じ本能に立つて居るのでありますが、其の本能を如何に實行するか、其の本能に基いて如何なる性情を發揮するかと云ふ點で、人間と他の動物と異なる點が生じて居ります、此の點を察して昔ギリシヤのアリストートルは「人間は社會的生物であると」申したのは此特色を見て申したので、今日に至つても、此眞理は動かすべからざるものであります、此二つの本能が本になつて社會的生活が出來る、是は一々申す迄もなく人間は夫婦の關係があつて、それからして親子の關係を生ずる、夫婦親子と云ふことが本になつて茲に家族生活が出來るのであります、是又

一々説明を要しないことであります。さうして人間の歴史を見ますると人間の生活には家族と申しても、今日は吾々の見るが如くに一夫婦に多くの子供と云ふ丈の家族の狀態は寧ろ極く近代の事であります、昔に遡ると家族生活と云ふものは種族生活である、祖先を同じうした者は幾夫婦も幾家族も一つになつて、さうして生活して居る、さう云ふ狀態は現在日本にも多少殘つて居ります。例へば飛彈の國に殘つて居る大きな家族生活に認めるのでありますが――私は名を忘れましたが御存じの方もありませう、彼の如く一軒の家の中に十組二十組の夫婦が一緒に住つて居る、大なる意味に於ける家族でありますが、昔の人類の生活はさう云ふ大きな家族が一所に一種族として住つて生存して居りました。

斯の如き社會的生活は即ち一方に於ては色慾の實行に依て子孫の繁殖を計ると共に、是等の人々の同心共力に依て生存を維持し、食物を得、且又場合に依り必要に應じては他の部落の侵畧を防ぎ、若くは他の部落を侵畧して、自分の子孫の衣食住の物資を得やうとして、生活して居つたのであります、斯の如き大家族の種族生活は即ち色慾と食慾との實行の最も原始的の形で人生の社會生活を造り上げて來たのであります。今一寸家族的生活種族生活の中で今の歐羅巴人なり印度人の祖先を遡つて見まするとと、彼等は中央亞細亞で牧畜生活をした、其の社會狀態が言葉に殘つて居る、英語で父をファーザーと云ふ、ファーザーの一番元に遡つて見ると、ファーと云ふ言葉は保護者と云ふことです、即ち父親家長たる

者は家族種族の長として保護者になります、それから兄弟のブラザーの古い言葉に遡りまするとブラザーと云ふのは、擔任者と申しませうか物を擔ふことです、例へば開拓をするならば其所らの樹を伐つて、其所を耕すとか物を集める、さう云ふ事を擔任する人間といふ意味です、それから娘――女を英語でドーターと言ひます、此ドーターの本の意味は乳を絞る娘と云ふことで、是は昔の牧畜時代の言葉である、今日の印度、歐羅巴人の祖先が牧畜時代に種族生活をして居つたのである、此ファザー、ブラザー、ドーターと云ふ言葉が其の狀態を意味して居るのであります。斯の如く食慾色慾の二つの本能に基いて、人間は家族若くは種族生活を以て社會生活の發足點と致したのであります。そこで此狀態に於ける人

間の結合は所謂本能的結合と稱すべきものである、夫婦親子で一種族を造つて生存を維持する、さうして子孫繁殖の道を計つて行く、此本能に基いて結合して居る丈の生活であります。

然るに、人間には新に生じて來たと申しませうか、元來有ると言ふべきか、そこは考へ者でありますが、特別の性能即ち理性があります。人間は何故理性を有するかと云ふ此事の關係を尋る必要があらうと思ひます、一寸心理學の講釋めきますが一例を取つて見ますれば、此所で私が此机を叩くさうすると音がする、之を唯視覺の方丈で申ますれば、諸君は私が之を叩いたと云ふ事を御覽になる。さうして其の間に一セコンドの何分の一何十分の一の早さで、其の音が此所に響いて來るに相違ない、さうして吾々は之を

眼で見、又は叩いた爲に音がしたと云ふことを、其の間に關係を附けて考へる、此所に既に吾々の理性の働きが備つて居る、知覺で叩くと云ふ事を見たのと、音が聽えたと云ふ二つがあつて、其の間に時間が續いて居ると云ふ丈でありますそれを其の間に必然の關係があるから音がしたと斯う吾々は考へる、是は誰でもさうであるが、斯んなことは一々考へない。吾々は眼で以て汽車が通つたことを見てピーと音がしたと感ずると、其れは汽車が來たから音がした汽車の動くのは機關士が運轉をするから動く、其の間に必然の關係があると云ふことを考へる、吾々は多くの事柄に對してさう云ふ心の働きを持つて居ります、併しそれが當り前であるかどうか分らぬ、唯今のことを段々延ばして行くと推理作用と云ふ

ものでゝ色々の問題を考へると時には錯誤して考へると云ふ事が生じて來ます。さう云ふ實例は澤山あります。例へば熱海の温泉には湯が涌いて居る、さうして何里か隔てゝ海の上に大島の三原に噴火がある、此二つの事に關係があるや否やは分らぬ、始終見て見ると一方の噴火が盛に起ると否とは、熱海の湯の沸くと沸かぬとにどうも關係があるらしい、と云ふ所に眼を着け其の關係を研究して行つて――此關係は今は能く分つて居りますが――彼の二つは地下に於て聯絡があつて、其の間に必然の關係があると云ふことを發見した。さう云ふ種類の事を段々尋ねて、其の間に必然の關係があると云ふことを發見する、其所に理性の働きがあるのであります。此の理性の働きは、要するに一見しては必しも聯

絡のないやうな事の内に、現在に於ても亦過去に於ても未來に亘つても聯絡のあると云ふことを發見する。そして人間が此理性をどうして得たかと云ふことは是は一つの重大の疑問でありますが、兎に角現在吾々の狀態を見ますると、人間は斯の如き意味に於ける理性を持つて居る、さうして動物には此理性がないと云ふことは是又隨分問題であります。例へば犬が自分の元の家を發見したり何かする、あれは理性を持つて居るからか否かと云ふ問題がある、或は主人が歸つて來ると尾をふつて迎へる之を理性と稱すべきや否やと云ふ問題がありますが、恐らくは是はまだ理性と稱すべきものでなくして、所謂人間の本能に過ぎないであらうと思ひます。細かなことを言ふと色々な議論はありますが、兎に

角大體に於て人間は理性があり、動物には理性がない、即ち其の意味に於て人間は理性的生物であると云ふ事が又言へるのであります。社會的生物であると共に理性的生物である、是に於て先程申した本能の生活に對しても人間は此理性を應用しなければ已まない、本能的結合に對して理性の承認を與へると云ふ事を要求する、唯色慾と食慾とに依つて結付いて居る丈の結合でなくして、其の結合の中には尙それより以上の必然なる關係がありはしないかと云ふ疑問を起します。又說明を加へると所謂本能なるものを唯一時の發作に伴ふ衝動作用と認めることは、人間の必然の性質と人生に必要なる性能で、且又之を承認しやうとすることは、一つの理性の働であります。人生の結合作用或は社會的結合に

對する理性の働きを尋ねて見まするとと、即ち其所に人生に對する義理の關係を發見して來る、義理を發見して結合する、それが義理の結合であります。例へば夫婦關係に依て見ましても、動物にも夫歸關係はちやんとあります。人間が男女の關係を濫りにすると畜生のやうな奴、犬のやうな奴と言ふが、併し畜生の方は自然に棄てゝ置くと却つて一夫一妻である、唯犬だの鷄だのと云ふ人間の手なづけたものは減茶苦茶なのですが、或女學校で鷄を飼つて殖產の事を敎へる積りであつたが、鷄は盛に色慾本能を濫りに實行するので、女學生に宜くないと云ふ事で、學校で廢したと云ふ事でありますが、犬や猫は勝手に盛に其の本能を發揮して、吾々の子供に見せて困ることがある、それを見て子供は親にあれは何をし

て居るのだと云ふ、喧嘩をして居るんだと云つて親は胡麻化しますが、人間の手なづけた動物より、自然狀態に居る動物は正しい大體一夫一妻であります、殊に鳥類は此點は至つて頗る濃厚なものである。支那や日本では夫婦共に歩くと鴛鴦のやうだと云ふが、勿論鴛鴦は一婦一妻で、鴛鴦は夫が妻か何方か其の內の一方が死ぬと續いて死ぬと云ふ、それ程一夫一妻の關係が濃厚で忠實であります、併し是は鴛鴦丈でない鳥は大抵一夫一妻であります、又哺乳動物の中の獅子だの狼だの虎だの狐などは同樣で、狐狸などは此點に於ては中々立派なものであります。私の友人に動物學者がありますが、狐の繁殖を計る爲に一夫多妻にしやうと思つて骨を折つて見たそうですが、どうしても いけない、細君を外に伴れて

行つて他の狐を伴れて來ても、牡はどうしても應じないそうです。此の點に就ては人間などは狐にも劣ると云ふことを或一流の人の前で話したのでありますが、實際動物は此の點に於ては正しい、人間も矢張社會生活を爲す上に於て自然にして置けば一夫一妻に近寄つて居るのであります。特別の事情のある西藏の如きは氣候の關係から婦人が多く死ぬ、さう云ふ所では一妻多夫であります。それから又熱帶の地或は極く物產の豐富な國で、人間が奢侈の生活をする、さう云ふ所では男が勝手な事を考へ出して一婦多妻の生活をやる。日本などでは隨分さう云ふ人は珍しくない、さう云ふ者は畜生のやうだと言ふが畜生の方からは何に奏人間のやうだと言つて居るだらうと思ひます。動物にも夫婦の道は

ある。一夫一妻が自然なのです、人間でも自然の社會としては一夫一妻である。今申した一妻多夫と云ふこと若くは一夫多妻と云ふやうな事は特別なのである、自然の社會としては一夫一妻であります。人間は本能作用としては、外の者を伴れて來てもそれに應ずる心は起らないのが自然の情である、一夫一妻を守る譯である、其の間には人に依て色々の差別はありますが、又人に依ては、自分の夫婦關係以外の關係を結ばうと云ふやうな生理的慾望の起らない程良心の鋭敏な人が中にはありますが、さう云ふ人は幸か不幸か文明人種と言つて宜い、狐は妻を離して外の者をくつ附けやうとしても夫婦關係を起さないが、人間は狐にも劣つたことをして、棄てゝ置いたならば、夫婦以外の者に夫婦關係を拵へて、矢

張犬や猫の眞似をしたがる傾向を持つて居る、さうして又それを實行する人もある、斯う云ふ人は人と申しますか畜生と申します か。所が人間は其の一夫一妻の結合に對して理性の解釋を下し、自然の本能に依て一夫一妻を結付けて人は斯くあるべきものだと云ふ一つの解釋を加へる、此の點は又もう一つ人間の發達の上に於て重大なることです。今日の吾々では兄弟の結婚は是は殆ど誰も考へないことであります、極く變則な場合に行はれる結婚である、要するに稀には行はれて居る場合もあるが、大體としては吾々一般の人は通常兄弟の結婚と云ふ事は考へられない、兄弟の間にも畜生は行ふことになつて居りますが人間にはない、併し人間も古い歴史に遡つて考へますと、兄弟で關係の出來た場合も隨

分ある、日本の歴史に現はれて居ることでも異母の兄弟、母親の違つた兄弟の間には是は當り前結婚關係を認めて居つた、それで兄弟の結婚はどうするかと云ふ事は一つの問題です、或人から言はせまするとと、惡い遺傳のある兄弟ならば結婚すると惡いが、極く體質の良い兩親の間に出來た兄弟は、下手の他の人間と結婚するより却つて宜い結果を得られると言ふ議論を唱へる人すらある、併し今日に於て吾々はさう云ふ事は殆ど考へられないが兎に角兄弟の結婚と云ふことは一つの問題であります。各國の上古の神話傳說にも此の事が遺つて居つて、兄弟の結婚と云ふことは神の罰を受けたのだと云ふことになつてゐます。これは何時の時代から何の爲でありますか、之には色々の說明などもありますが、兄

弟の結婚は惡いとして、さうしてそれは卽ち人倫の常經であると云ふことになつて來たのであります。それが將來どう變化し、是が轉倒するかも知れない、今日までの狀態に於て夫婦關係は一夫一妻が原則で、又夫婦關係として異母の兄弟の結婚は惡いとする、斯う云ふ種類の所謂規則が出來る、其規則は唯出放題に定めた規則ぢやない、人間の常經或は又理性の要求からさう云ふ種々の法律が出來た道德的法律です。又今申したのは夫婦關係、色慾關係に基いた方面のことでありますが、食慾關係に於ても同樣であります。人間は自分の生存を維持する爲に衣食住の供給をする爲に財產を持つと云ふ事が出來たのである、そこで唯今は法律として財產は侵すべからざるものとなつてゐる、自然に斯う云ふ事が

定つて來た、是も亦一つの大きなもので、私有財産制度が起つた事であります。前回申した所の私の考では私有財産に對する思想は、今日餘程問題になつて居るが、是が變化すべき時があらうと思ひます。それは姑く別問題にしまして今までの人間の發達の上に於て私有財産制度を認め、且つ之に依て各々相當な財産を持つて、さうして互に侵すべからざるものとしてある。イギリス國の古い法律或は神の訓戒に見ましても、盗む勿れと云ふ事がある、佛教の五戒の中にもありますし、基督教の十戒の中にも盗む勿れと云ふ事がある、さうして私有財産を認め、互に侵すことの出來ない法律があります、さう云ふ法律がどうして出來たかと云ふ事は此所で研究するの迄はありませんが、兎に角斯の如き色慾生活から

出た夫婦關係、食慾本能を滿足させる爲の財産關係、其の他それから來る有ゆる方面の生活狀態に對して、人間は茲に法律的觀念、道德的規律、秩序と云ふ觀念を以て、之に對するやうになつて居ります。例へば夫婦の事に就てもう一度申しますれば、所謂本能生活から言ふと男と女とは自然に結合するのが天性で、夫婦室に居るは人の大倫なり、何れの道德何れの宗教でも夫婦室に居るは人の大倫なりと云ふことは多少形は異つて居るが認めて居る。斯の如くにして其の本を質せば本質は動物的本能生活から結付いて夫婦と云ふ道德的の結合となつて來る、財産を持つ原因も同樣であります、自分の生存を維持する爲に物を獲得しやうとした慾が、今度は秩序的に互に財産を守る法律にもなります、斯の如く秩序

が出來て來ると共に人間社會は即ち種族が段々擴張し或は保護し、さうして遂に今日の國家と云ふ結合をも生ずるやうになつたのであります、即ち本能結合の狀態が段々家族的種族的の生活となつたのであります、其の生活に對して理性の說明を與へ理性の命令が加つて秩序義務と云ふ觀念が生じて、さうして其の秩序義務を法律として整へると云ふ爲に、國家と云ふ團結が生じて來たのであります。

現在の世界に於ては種々の混亂が存在して居りますが、國と國との關係の上には多少國際法と云ふものとなつて、正義の觀念、義務の觀念が生じて居りますが、併しそれよりも有力なのは國と國と利害を異にし、互に勢力を以て爭ふと云ふ狀態になつて居ること

であります。人間は現在の世界に於ては國家と云ふ團結程にはまだ進んで居ないのでありますが、それ以上に進まうとする勢力はまだ十分有力でないのであります、併ながらそれ以上の人類全體の結合に對する勢力は以前から現れて居る。殊に又今日の戰爭にそれが一層痛切に現はれて居ります、今日の戰爭に關係の方面は今申述べる迄はありませぬが、併し一寸私の考を申述べるならば戰爭の爲に國際道德的觀念が蹂躪され、國際條約は何の力あるものでなくなると云ふ考が往々にしてありますが、私の見る所では却つて其の反對であります、古から大戰爭のある度毎に必ず其の結果として、國際道德の觀念が進み、それ丈發達して參つたのであります、さうして現在の戰爭に於て此の世界は二つに分れ

て戰爭して居りまする、少くとも聯合國の國際聯絡國際結合の觀念は事實上は益々進みつゝある此の勢力が今後の世界に對して有力なる結合の觀念となると云ふことは、今までの歴史の先例に見ても明白なことである、先例は一々申上げませぬが今までの歴史から見て戰爭のある度に必ず國際の條約觀念と實行とが進んで居る、それに現在の聯合國の結合は益々進む、其の點に於て重要なる勢力となります、今後世界に於て一國丈の力を以て國を立てやうとする人であつたならば、斯の如き國は世界の國々から除かるゝ外はなからうと思ひます。

それは姑く別問題として今までである國家以上の結合を成すものはもう一つ宗教があります、此の宗教の結合或は宗教が人生の

結合力の理性を中心として結合して居ります、即ち理性を中心とするのは人類の生活が過去現在未來の人生に亘つて密接の關係がある、人間が自覺したのみならず、其の聯絡を密接にする事が實際に現れて來るのが即ち宗教の理想であるのであります。人類の生活が密接の聯絡があると云ふことは先程申した如く其の本を尋ねて見たならば、本能生活に基いて居ります、併し人間は本能生活を發達して、さうして直接には夫婦親子の間に起る愛情を引伸して之を下女に及ぼし、之を國民に及ぼし之を人類全體に及ぼす傾向を持つて居ります、否な斯の如き要求を持つて居るのであります、さうして斯の如き聯絡を唯偶然に出來て來た聯絡と見ないで、人生の必然なる聯絡、人生の理想として其方に向つて進むべ

き狀態として、之に憧れ斯の如き聯絡を求めるのであります。例へば之を極く簡單の方面から見まして、人間の精神の所謂交通感應は種々の方面より知ることが出來ますが、極く簡單の方面より言つて見ると詩歌の如きもので、人間は互に感情を結付けるのである、例へば芭蕉が深川の偶居に居つて靜に閑靜な自分の家の庭の池の蛙を見て「古池や蛙飛込む水の音」と云ふ一句を殘して置いた、其の感化を受けた吾々が其の時の狀態を考へて見ると、所謂人事の境遇上寂寞の芭蕉の心を共に呼吸することが出來る、今日は深川は機械工場地と化して機械の音に騷しくなり、當時芭蕉の聽いた蛙は既に死んで仕舞つて居るに違ひない、芭蕉翁時代の面影はないに違ない、併ながら風流の餘韻は尙存して「古池や蛙飛込む

水の音」なる句の寂寞の有樣を想像して見ると、吾々は芭蕉の心と我心と相通じて考へることの出來る性質を持つて居る、唯通じ得る丈であるが、さう云ふ意味の聯絡を吾々は常に求めつゝあります。近い所で言へば人間が見ぬ戀に憧れると云ふ事が詩や小說の種になつて居るのも其の一つであります、直接に見ない人でも其の人を戀ひ焦がれる現在居る人なら戀ひ慕ふ、沒くなつた人ならば其の人と心を相通する事が出來る、日本では極く子供の時は誰でも好くのは秀吉、義經であるが、源九郎義經は日本の英雄の中の一番崇高な人である、其の心は吾々と相通ずる、今日に於て吾々が其の心を想像して見ることが出來る、是などは極く傳記小說などに依てゞあるが、其の心がもう一つ强くなると、本當の崇拜にな

る、例へば或る宗教家が自分の宗旨の開祖に對する信念を持つて居る、日蓮宗の人が日蓮上人を信仰して居ると、常に自分の心は上人に通じ、自分の心を上人の心の如くしやうとするさう云ふ人が何かの機會に際した場合には自分自からも怪む樣な働きを爲す、若くは何か其の人が非常な打擊を受けた場合には上人の事を考へ、上人にして此場合に遭遇されたならば如何に處せらるゝかと考へて、自分の心がそれに依て活きかへつて勇氣が盛になる、其力をインスピレーションと云ふ。基督教の信者が何事か人生の危機に際した場合に基督にして此場合に際會し給はゞ如何にせらるゝかと、基督の心、基督の人格を考へそれに依て人生の危機を切拔ける、是は矢張交通感應の生活であります。人間の心は所謂其所には

眼に見えないでも、直接に眼に觸ない人々と感應する力を持て居る又其要求を持て居ります。斯の如き所謂感應の相手となるのは單り今申した日蓮上人とか或は義經とか基督とか云ふ具體的の歷史的の場合でなく實際の人物も同じ感化を得る、今は義經の事を今しましたが、もう少し小さなもので、子供は桃太郎さんが好きた、桃太郎さんは實際に歷史的に居なかつた人間で、日本の子供の理想的產物としてあるのであるが、子供は此の桃太郎さんから非常な感化を受ける、それと同樣に吾々は眼に見えない心靈と交通することが出來る、其の交通は信仰と稱し感應と稱するものであります、それ等の點を今一々申述べると宗教全體のことを申すことになりますが、斯の如き意味に於ける人生の聯絡感應を說明

する一つの歌に就て申上げやうと思ひます、此事は前に其の文章を公にした事がありますから或は私の考を御覽下さつた方もあるかも知れませぬが、彼の管公の歌と稱する「心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神やまもらん」と云ふ歌があります、彼の歌を世間の人達は殊に稱して解釋などをして、あの心で居れば宜い「心だにまことの道にかなひなば祈らずとても神やまもらん」それで宜いのだと云ふ人がある、現に大隈公も彼の國民讀本の中に書いてあります、併し此歌は管公の歌を載せてある文には斯んな歌な勿論ありませぬ、是は徳川時代の初めに出來たものであります、此歌は少し考へて御覽になれば破綻が直ちに出て來る「心だにまことの道にかなひなば」と云ふ條件附で、さうして此條件がある

ならば「祈らずとても」此方から私は祈りはしませぬが、神様が守つて下さる若くは守つて下さる筈だ、斯んな敬虔の心、信仰の心と正反對なことを管公が言はれる譯がない「心だにまことの道にかなひなば」と神様に條件を持出して祈らずとても守つて下され、と神様に守つて貰つて感應交通すると云ふことは出來るものでない、是は矢張徳川時代の者の作つた歌で管公の如き信仰のある人、眞心のある人の作つたものでない、そこで、それの正反對の對照として、所謂感應のことで、今申した人間の心には直接自分と相接する人の心と交通し、又進んで眼に見えぬ神の心とも交通すると云ふ意味を能く現はした、今のと對照すべきものを一つ申上ます。それは先帝の御製で「めにみえぬ神の心にかよふこそ、ひとの心の誠な

りけり」是は先程のと非常によく似て居るやうであるが、大變違つて居ります。「眼に見えぬ神の心にかよふこそ」條件附でも何でもない、我心が何とは知らず眼に見えぬ神の心にかよふ其所に我心の誠がある、我心を斯やうに發揮する事が出來る是が即ち信仰で、管公の歌と稱する者とは非常な違ひであります。之をもう少し通俗の意味に言た里住宗忠の歌に之と同じ心があります。「天照す神のみ心人心一つになればいきとうし」天照す神と言へば天照皇大神のことで皇室の御先祖である事は多く申上げる必要はない事でありますから姑く別問題としまして、其の天照す大御神の心と人の心とが一つになれば、いきとうしである、里住宗忠は此「いきとうし」と云ふ言葉を能く使つて居るが、いきとうしと云ふ事は佛

教の所謂感應である、人の心が眼に見えぬ心靈と通ずる、我心が三世若くは全世界に通ずる、さう云ふ大なる聯絡を求めることが出來る、自分の生命は唯五十年と云ふ小さな年限のある一生涯であるが、此我心と云ふものゝ中には永遠の生命が宿つて居る、我一生の中に其の神の靈光に幾分でも接し、さうして斯の如き不滅の生命理想を一部分でも此一生の間に實行する事が出來るやうなれば其の眞心はいきとうしである、又我此生命は五十年いきとうするが、其の心は宇宙全體、人類全體、世界全體國家永遠に亘つていきとうしである、是が宗教の信仰の爲に得たことであります。此意味から申しますると即ち先程申した本能的結合義務的結合をする、それをもう一歩進めれば宗教の與ふる基礎的中心の結合を生

じて來ます。斯の如く聯絡を求める、此心に依ても人間が聯絡し結合することが出來ます。

我、人共に人生の理想を求めさうして心を一にして同心共力の生活をすることが出來ないか、若し是が出來るならば、其の結合は理想を中心とした結合であります、斯の如く人類全體に通ずる全世界に聯絡すると云ふことは、それは唯無差別である、平等主義であると見られた場合があるが、必しも無差別でないのであります、斯の如く見ました理想結合は矢張、其の立脚地は本能生活に立つて居る、此意味から言つて見れば人生は其の初めは動物と同じ共通の基礎の上に立つて居る、其の人生の土臺は先程申した理性の承認を經た所の義務、道德的生活をして、さうして一方は今申した

理想の生活に於て人生と相通じて生活して居るのであります。一足飛に社會が無差別のものでない、宗教の信仰は自からの親を愛すると云ふ心を永遠に親に傳へるのである、親を愛する心を以て子を愛する此心を一切の人類に及ぼすに過ぎない、實際之を行つた人があるそれは釋尊で、釋尊の一生は種々の方面がありますが、それは慈悲の方面から見ますれば一切衆生を我子として見たのでありました、斯の如くして道を說き斯の如くして感化を及ぼした爲に、自分の國を棄て、自分の妻子を棄てた、それは人生を棄てゝ仕舞つたのではない、一切衆生を救はんが爲に棄てたのである。ラゴラは釋尊が自身の家に居られた時に出來た子である、其子のラゴラを愛する、此所に佛陀の精神がある、佛教は此心から生れた

のであります、此子を愛する心は本能から出る、此本能生活を一切衆生に及ぼすやうにして行く、茲に理想的結合の精神があるのであります。基督の場合で申しますと、丁度己の親に仕へる心を以て天の父に仕へる、基督を信仰して其の爲に親を無視するなどと云ふことはない。人は本能的行動として親を愛するから他の人も愛する、其の心を推擴めてさうして萬人の親なる過去現在未來永遠に亘つて變らない大なる御親に使へる、吾々はそれを信じて自分の親を愛すると同樣に天の父親に仕へることが出來る、夫婦に致しても夫婦相愛する心より推擴めて見ますれば、人類の相互補助となる、夫婦の生活は直接には色慾本能でありまず、色慾本能から進んで相互補助となる、夫婦相互補助の生活は重要な點でありま

す。パートバー、日本語で申すと相互補助、互に助けて行く、夫婦の情を以て直ちに全體の人類に及ぼす、廣く言ふと夫婦以下の生活も相互補助の心を以て家族を造つて行く、其の心を以て一切人類に及ぼして人類全體が相互補助で交際したいのであります、是は能はざるにあらず、爲さざるなりで、人間が之を實行しなかつたのであります。斯の如く親子にしても夫婦にしても其の本能の情を本にして立つ、決して之を離れては吾々の生活は立つものではない、本能の生活に立つて、さうして心靈界に集まらうとする、茲に人生たる値打があるのであります。

尙此點は所謂道德と宗教との問題にもなりますが、其の點をざつと一點丈申述べて置かうと思ひます。

宗教のことは姑く措きまして、日本道德に忠孝に關する問題があります、忠と孝と何方が重いか、兩方一つであるか、此忠孝問題の基く所如何と云ふ問題がありますが、兎に角現實の社會組織の上から言へば、孝行の行動は親に對する子の情で、忠の本は君に對する臣下の情である。本能生活から言へば夫が本である、それを廣めて君と結合する、是が人生の道德の大本となつて來るのであります。併し唯人生の約束事として君と結合する丈でない、そこで孝經には、忠孝は即ち天地の義で、單に人生の道でない、天地の道であると云ふ所まで進んで居ります。又此忠孝の教への忠孝は既に單に道德と稱すべきものでなく、「天地を本とし天道を本にした一つの宗教であります。儒者の中でも此孝經の此心を重んじた

人は比較的少ない、日本では中江藤樹は一番此點を重んじた、藤樹先生は御存じの通り、親孝行の人で、母に仕へて至孝の人で、直接に親を愛する情、孝行の情を本にして、唯自分の親子の情を本にして、全體の人生に及ぼした人であります、藤樹先生の事を一々申しては居られませぬが、先生の「翁問答」の中にある、此點に關する一節丈を一寸申上げて置きます、即ち自分の身を本にして天地に推擴げる其、翁問答」に

「さて元來を、よくおしきはめて見れば、わが身は父母にうけ、父母の身は天地にうけ、天地は大虚にうけたるものなれば、本來わが身は大虚神明の分身變化なる故に、大虚神明の本體を明にして失はざるを、身を立つると云ふ也。大虚神明の本體を明め、たて

たる身をもつて、人倫にまじはり、萬事に應ずるを、道を行ふと云ふ。」

是は唯一句でありますが、要するに我身は父母に受たのであるが、其の父母自からの生命は何所から來たかと云ふと、天地の生命が父母に起り自分に起り、其の心を推擴めて行くならば、天地に仕ふる心になる、天地の道は外になし、我心の中にある、其の心は天地大虚の神明である、其の神明に仕へるのを道を行ふと云ふのである、是が誠の道である誠の道德である。藤樹先生の忠孝は要するに斯の如き意味に於ける忠孝で、之を以て直接に己の親に仕へる、之を大にしては天地の命を以てそれを己の一身に求めた人であります。

斯の如くにして所謂理想の結合と吾々人類の生活を過去現在未來に亘り、全世界の人類に通じた聯絡を求める、それに依て結合すると云ふ事であります。其の結合をする本能生活、義務生活の中に共に意義を求めて、其の間に理想を發揮して來るのであります。是が即ち宗教の當る所の難關である。又斯の如き理想生活には理想の程度と、色々の宗教が今までありますからして、各個々に對して國民的生活をする、其衝に當つた所以であります。是は又歴史のあることでありますから此一點丈を申上げて置きませう。佛教が日本人の社會的感化の中で一番重要であつたのは、因果の理と、回向の道德、此二つは日本人は元佛教渡來以前にはどうであつたか分らぬが、佛教が日本人に此考を以て非常に大きな感

化を與へたのは因果の關係である。即ち人生には必然の聯絡がある、之を推擴めて見ますれば、即ち人生の聯絡義務結合を率ゐる力を現したのである、此因果の聯絡の生活と其の外に吾々の家庭に於て爲すべきことがもう一つある。それは回向功德の生活である。回向と申しますると、今日は多くは盂蘭盆にお經でも讀んで貰つて、鉦でも叩いて禮拜するのを回向と思つて居りますが、それも回向の一つには違ひありませぬが、極めて大きな回向を申しますれば、初に申した行基菩薩の如く、日本の各地を歩いて山林を拓き河を掘り築港をする、是も功德回向で、此中に善良なる貴きものがある、自分の物を他人に分ち與へると云ふ丈でなく、之に依て他人と共に善を充實しやうとする、其生活が功德回向の生活であります。それ故に今日金のある人が自分の金を公共的の事に捧げる、回向と云ふことは力のある者が其の力に依て社會の利益を計るのも功德回向の生活である。其意味から申しますれば教育事業に盡すのも功德回向である、殖産工業も功德回向の事業である、夫が唯眼前の利益を計り、金を撒く丈でなしに斯の如き力ある者は力を出し、富ある者は富を開き、互に助けて人生の圓滿なる發達をしやうとする其の心を以て行ふことが、功德回向の生活である。己の信ずる所を之を體現するとか云ふことでなく、自分丈の私有財産にしやうと云ふことは、丁度功德回向の生活とは反對の生活であります。例へば私は先程財産私有のことの例に申上げたことは食慾の發達と云ふことでありました、食慾が發達して唯財

産を持つやうになつても、唯慾で幾ら溜めたと云ふことを樂みにして居る丈ならば、それは唯食慾本能生活の儘で止つて居るのである。然るにそれと違つて金を溜めることも唯慾で溜込むのでなしに、其の溜めた所の富を立派なことに使ふ、社會公共の事に使ふと云ふ目的でどし〳〵金を儲けて公に捧げると云ふ生活をするのが功德回向である。カーネギーの如きは食慾を發達することを能く十分にして、何億何千萬圓であるか知りませぬが、澤山の財産を持つて居る、併し世の中の慈善事業と云ふ有ゆる事業に金を出して居る、カーネギーは公共事業に十分に金を出して居る、是は功德回向の生活です。此功德回向の生活は元は食慾本能から出たものである、お互の食慾本能を發達して、口で食つたり飲んだ

りする、其の食慾本能が大きくなつて行くに從つて金も溜める、さうして有形にも無形にも之を樂まうとする、功德回向の生活をする、斯の如き意味の功德回向の觀念を興へ、又實行を促したのは、日本の佛敎の歷史には斯う云ふ事實がありませぬ。總ての社會的事業の起るのも此考へから起るのである。要するに斯の如き宗敎が與へる感化の力は、初めに申した價値を轉換する。人生根本の土臺は食慾色慾に外ならぬ、又それを以て人生は現在斯く義務結合を爲し秩序を整へて、それ以上の、もう一つそれに對する價値の轉換を要求するのであります。本能結合を擴張し轉換しそれ以上の價値のあることを促進せしめて、人類の結合的生活を爲さしめ、現在の人類に過去未來の三世に聯絡ある大なる可能の生活

を爲さしめる、其の實を擧げるものが宗教の力であります。即ち此意味から申しますれば、唯一小部分の人種の人々にしても、個人としても、又國家の一民として其の能を盡さしむると云ことは勿論であるが、其の能を盡す上に於ても、唯其の一部分の仕事をして居ると云ふ考でなくして、それ以上の大なる理想、大なる目的がある、其の一部分として仕事をして居ると云ふ自覺を與へるのにありませう、斯う云ふ意味に於ける宗教の理想は卽ち人道主義であります。人道主義を離れて本當の感化と云ふものは存在し得ない、國家的宗教と云ふことの考もありますが、勿論或意味に於て國家の福利を計ると云ふことは、宗教の目的の一部分には相違ない、其の場合があるとしても決して差支ない、併し國家以上の義務結

合の理想以上に人類を引上げる力のある宗教でなければならない、宗教の本來の意味から言へば、宗教は人道主義であります、但し人道主義と申しましても直ちに平等の人道を言のではない、人道主義と云ふ事を之を主義に求めるに及ばない、人として各々其本性を發揮する、茲に人道主義がある、他に人道主義あらんやであつて、之を部分的に言へば、近く吾々は人道を常に行つて居る、此所に講話會に集つて居る人々互に相愛し互に功德回向をする茲に本性がある、何となれば此所に吾々が集つて共に眞理を求る、眞理を研究する、眞理を普及すると云ふ場合に、其心は本能結合の家族の一人として國家の義務結合の一部分としてやるとは限らぬ、吾々が此所で個人として學問を講ずる、其の時には吾々の心は人とし

て本性に依て眞理を研究する、茲に人道が現れて居ります。否なもつと簡單な所から申しますれば、電車に乘り降りすると云ふ場合は互に自分の本性を發揮する。此時に人間としての品格を現はせばそれが即ち人道である、斯う申すと私は常に考へるのに、東京の電車の乘り降りをする人を見るに、唯一秒一瞬の間も先きに乘らうとして、人を突き除け人を踏倒すまでにして乘降をする人があります、殆ど東京の人の大多數は是である、此大多數は人間でなくして鼬鼠若くは貂になつて居る、顏付形は人間のやうにして妙な眼付をして居る、即ち是等の人は姑く人間の本性を失つて鼬鼠或は貂になつて居るのである、吾々は形體が貂にならない以上は人間は人間として、電車の乘降をするやうにしたいと云ふ希望

である。人間は人間としてと云ふのは即ち人間は社會的生物である理性的の生物である、然らば電車に乘降をするにも社會的動物として、互に相讓合ひ、若くは互に持合つて秩序を立て、さう云ふ事をしないやうにして、人々を突除け妙な顏をしてキョロ〳〵其邊を見廻しながら走つて居るのは人間を忘れて鼬鼠になつて居るのであります、此場合に人間の光明に觸れて電車に乘降をするにも、我は人間だ彼も人間だ近く電車に同席して居る者は、共に此社會の人間として、敵に非ずして同胞兄弟であると云ふ心持で、電車の乘降をすれば、茲に今申した人道主義が行はれるのである。敢て之を人道主義と申さずとも宜しいが要するに人道主義は人が各々本性を發揮すると云ふ事であります、自分自からの本能を

自覺することである、自分自からの人格を尊重してそれと共に他人の人格を尊重する、此所に於て精神的自覺のある人間が共同結合をして生活が出來て行くのであります。既に此共同結合が出來るならば其の共同結合は唯本能丈の結合に過ぎない、是等は勿論根本に於て必要であるがもう一つ上の義務結合、法律若くは道德に依て結合する社會、法律に依て纏める以上に精神を同じくし理想を同じくする人類の結合、自覺を以て生活する事が出來て其所に即ち人道主義の生活が現はれて居ります。例へば單に義務法律丈の結合で生活する人の例を申して見ますれば、現在でもありませうが昔の殊に德川時代には「旅の恥は掻き棄てだ」と言つたのは、自分の生活を義務結合法律關係丈で結合した、德川時代は

自分の村に於ては世間の義理を重んじ外聞を重んじて、其の圍内に於ては法律を守る、是が自然の不文法であつたが、自分の村から一度足を踏出すと、旅の恥は掻き棄だと德川時代には言つた、斯う云ふ種類の結合は人間の生活を爲し得ると云ふ丈の價値のない憐なものとなる、從つて一歩村から出たならば道德を守らないでも宜いと云ふ考になる、さうして村に居る時はそれを守らないと生活し得られないから、德川時代の昔の人は之を守つたのである。併し今日でも是と同樣な考の人はあるのであります、即ち日本人は日本國内に於ては法律を重んじて居る、併し外國へ出たならば別問題で所謂生存競爭の世の中である、人を突除けても害しても己の利益を得れば宜いと云ふ主義を唱へ、若くは實行して居る。

例へば日本國内に於ては法律を守つて居る人でも、一旦滿洲へでも出掛ると馬賊の中に入つて、其所らを荒して居る、其の樣な事を平氣でやつて、國權の擴張とか何とか言つて居るが、さう云ふ人は少も日本の爲にはならない、日本國内に居ては人間らしい事をする人でも、一歩海外に出ると人間らしくなくなる、斯の如き人間には決して國權の擴張は出來ない。國内に於て法律を守る人間ならば國外に出ても矢張其國の法律を尊重すると云ふ精神を持たなければならぬ、斯の如くするには例へば義務契約に於ける法律を尊重する丈でなく、それを一貫して各個人が自分の生活に及ぼし法律契約に於ける尊重の心を貫き、其の上に矢張もう一つ人道主義理想結合の精神がなければならぬ。言葉を換へて言へば人

間は人間として我、人共に尊重し、互に助けて行く、其同結合の精神があつて、初めて法律を守る、心も人道と一貫したものとなる、其の心を持つて見ますれば、本能生活も今申した功德回向の種々の生活も、先程申しました如く、人間の生活は初め動物丈の狀態から義務結合を以て法律以上に出ないのが、其の内からして心靈界の理想の世界に接しなければならぬ、其の理想の世界に接し得て初めて其立脚地が唯動物丈の本能生活でない事になる、法律は矢張道德と違つて唯規則を守ることを中心にして居るのであるが、又之を理想として慾する心にもなるものであります。尙此點に就ては敎育勅語との關係のことを申さなければなりませぬが、それは畧して置きます、斯の如き宗敎生活は、結着する所斯の如き意味に

於ける人を人として、人生を完ふせしめ、人の性を充實せしむる爲にする事を目的にする、即ち人間の共同生活の精神を進めて、其の結合の心を唯本能や法律の境に止めずして、人生は天地宇宙と共に生活すると云ふ心を進めるには、己と一切衆生と共に同一の根底の本に同一の生活をなして其の聯絡を持つて居ると云ふ事を自覺し、さうして同一の理想同一の道を歩むと云ふ茲に宗教心がありまず、斯の如く見ますれば所謂社會的問題と云ふことも、要するに人生を其の社會的結合に於て圓滿に發達せしめると云ふ事が歸着目的でありませう。或は社會問題の種々の方面があるにしても其の根本的の解釋は要するに今申た如く、宗教的生活の主義精神を本とし人と共に同じく此理想聯絡の自覺を以て、人間と

して此世界に共に住んで居る以上は互に共同責任として、惡人が一人たりとも殘つて居るとすればそれは他の人間の共同責任として、殊に社會的理性的人間としての社會全體の共同責任を自覺し、其の心を以て共通の理想を實行して行く、茲に卽ち社會問題と宗教生活との結合點があり茲に多く社會問題に與ふべき光が存在するであらうと思ひます。

宗教生活と社會問題終

大正八年四月十三日印刷
大正八年四月十五日發行

宗教生活と社會問題
定價金一圓十錢

講述者　姉崎正治
編纂兼發行者　川邊昌美　東京市神田區表猿樂町十番地
印刷者　中川力　東京市牛込區市谷谷町九三番地

發行所　東京市神田區表猿樂町十番地
通俗大學會
電話本局四二九六番
振替東京五九七番

複製不許

サンデー社印刷

工學士 松川雄三先生著

近刊

誰にもわかる

電氣の話

◆四六判布裝上製箱入 ◆定價約金貳圓 ◆送料金十八錢

◆寫眞版挿繪百六十個 ◆十二章百六十項盡く興趣に富む

内容一斑

第一章 總論——第二章 靜電氣——第三章 動電氣——第四章 磁氣——第五章 電機——第六章 電線路——第七章 電燈——第八章 動力——第九章 電氣鐵道——第十章 電氣化學及電氣精錬——第十一章 電信電話——第十二章 發電所——附錄 電氣に關する注意五項

(東京神田) 通俗大學會發行 (振替東京番五九七)

通俗大學文庫 第一編

法學博士 男爵 阪谷芳郎閣下著

最近の東京市

袖珍美本 定價金三十錢 送料四錢

好評再版

萬朝報……一身一家の事は言はずして誰も心を勞すれど、我が住む都市に關心を有する者依然少きは歎ずべし、此書は前市長たる著者が自治體としての東京の現狀及當面に横はる諸問題の輪廓を示せる者、市民が一讀を拂ふに適當の小冊子なり……

通俗大學會 第二編

侯爵 大隈重信閣下著

國民教育論

袖珍美本 定價金三十錢 送料四錢

好評再版

東京日日新聞……大隈侯の國民教育に就ての所見を知に足る第一維新前の教育を說き漢字制限教育年限短縮試驗の寬恕支那教育の弊等にも論及し全編廿七章最後に日本民族優劣論有やまと新聞……現時の吾教育界の混沌たるを斯界の爲に言々句々侯が滿腔の熱血と抱負とを吐露せるもの萬人の一讀すべきもの……

(東京神田) 通俗大學會發行 (振替東京番五九七)

通俗大學文庫 第三編

男爵 後藤新平閣下著

日本膨脹論

袖珍美本 定價金三十錢 送料四錢

好評五版

近刊後藤新平男の日本膨脹論を讀む、其說く所は悉く是れ我政界に缺如せる人文史的批判也、其內容より云へば嚴然たる國民哲學の樹立也。外形甚だ小なりと雖も理趣豐滿姿態橫溢淸新潑測の元氣全卷に流る、之を一政治家の氣焰と見るは當らず吾人は懸値なき快書として江湖に薦む！ やまと新聞所載

盡さんとす

通俗大學文庫 第四編

文學博士 建部遯吾先生著

都會生活と村落生活

袖珍美本 定價金三十錢 送料四錢

好評再版

萬朝報曰く……都會過賑農村荒廢の現狀を叙しその病源を抉出して兩者生活の調節に言及せる者なり言や奇矯に過ぎたる嫌なきに非ざるも問題の根本に觸れ却て得々たる官吏有志の徒に痛棒を加へたるは愉快なり……

東京（神田） 通俗大學會發行 振替東京五九七番

通俗大學文庫 第五編

法學博士 松岡均平先生著

日本の植民的發展

袖珍美本 定價金三十錢 送料四錢

好評再版

東京朝日新聞曰く……廣く植民的發展及び日本の植民的發展の意義を概說し、更に日本の植民的發展の內容を論じ以て大和民族の植民的發展に關する過去と現勢との要領を說き之を諸外國の事實に對比し大に國民の自覺を記述するに足るものなり……

通俗大學文庫 第六編

文學士 後藤朝太郎先生著

文字の起源

袖珍美本 定價金三十錢 送料四錢

好評再版

國民新聞……先づ文字の起りを調べ意義を明かにし置きそれより假名の起原を尋ね文字構造の意匠を說き支那文字、アッシリア、バビロニア文字、埃及文字等の起原を叙し更に文字の上より古代文明を考察し而して最後に年農男畜等の十數種字について其の起原を確めて筆を結ぶ簡潔明瞭に又通俗平易に何人にも容易に文字の起源を會得せしむ……

東京（神田） 通俗大學會發行 振替東京五九七番